江戸名所圖會

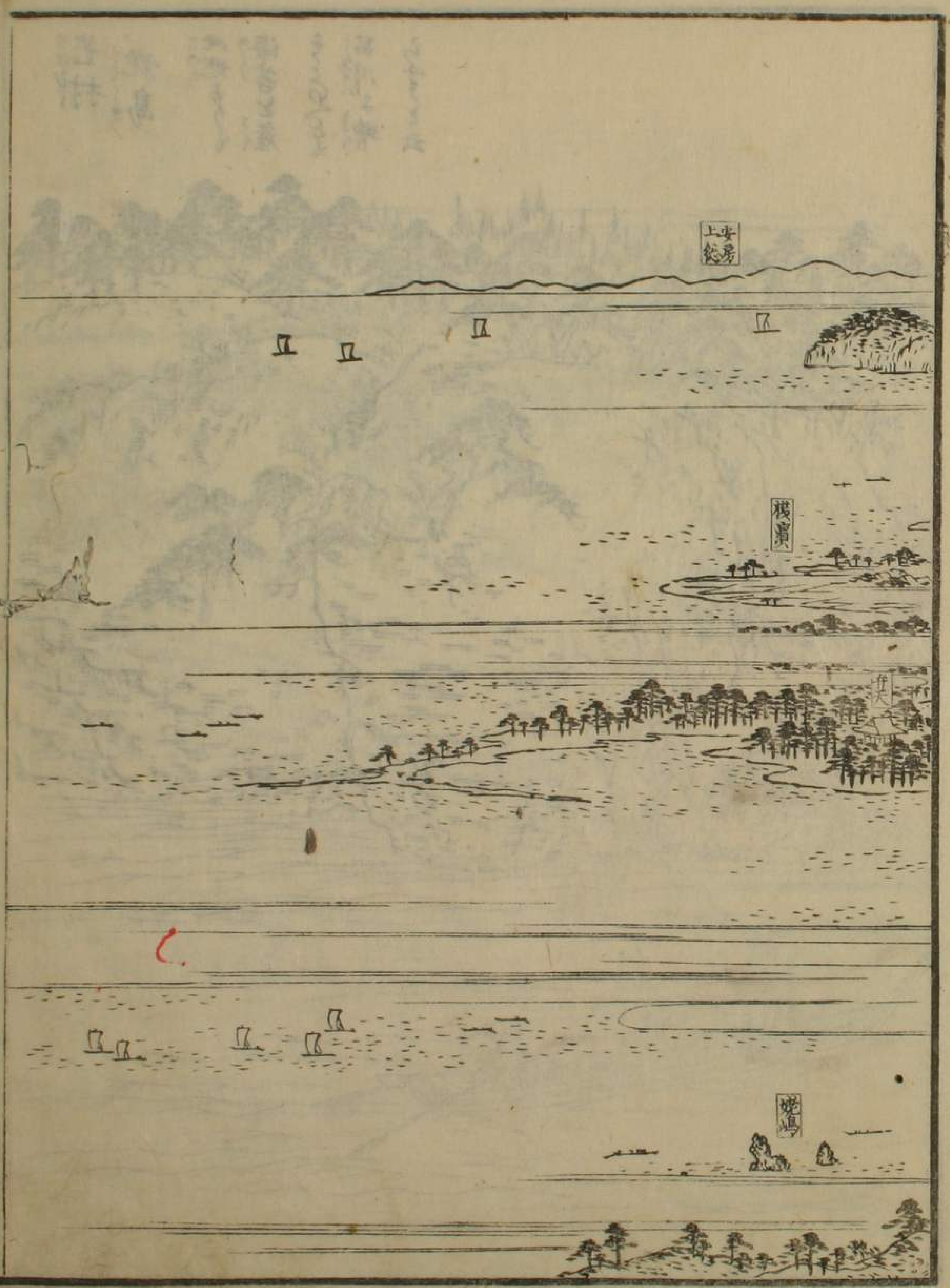
六

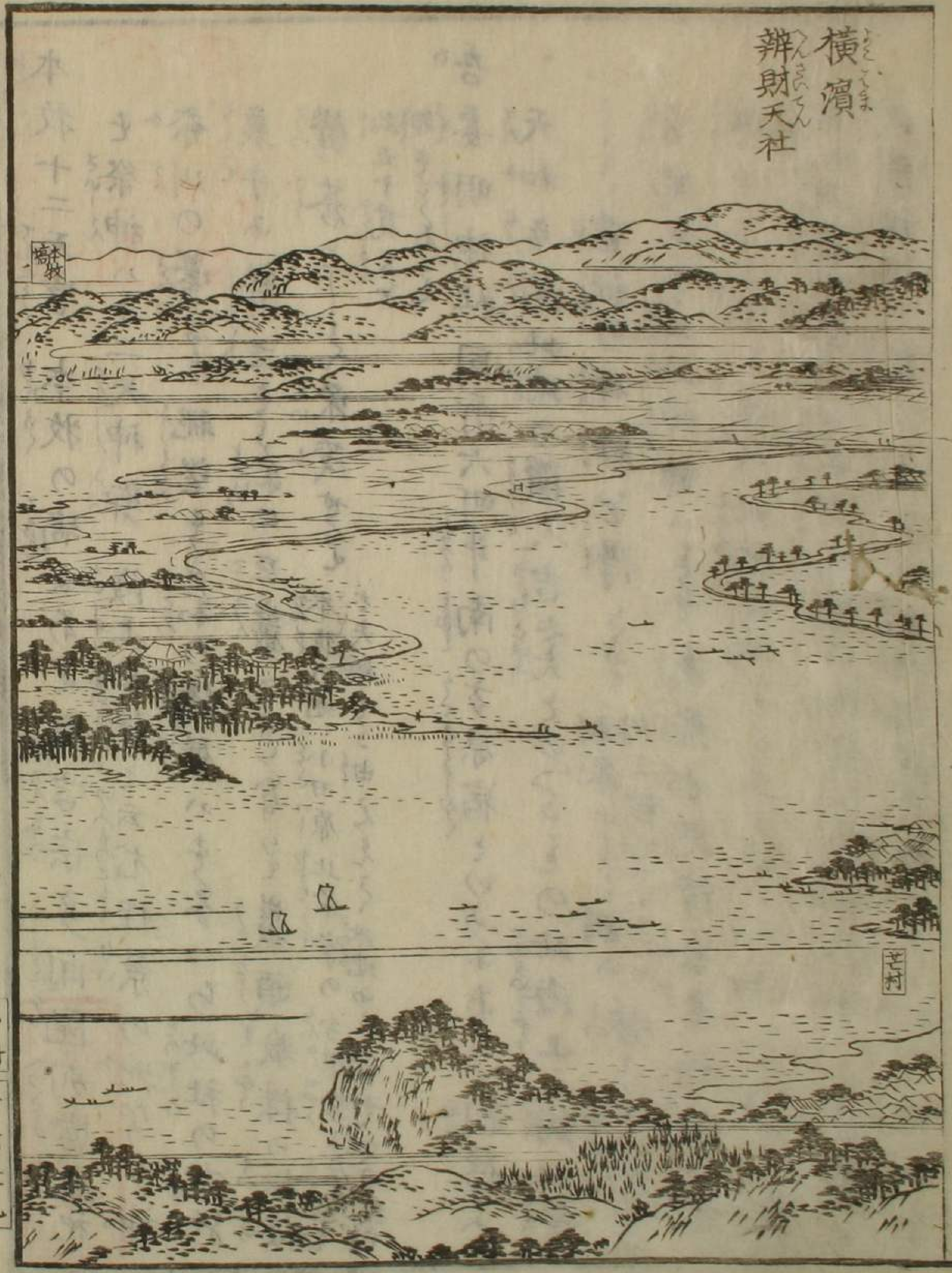
ル 4
3605
6

本牧十二天宮　本牧の塙にあり真言宗多聞[illegible]
も祭神ハ十二天神躰ハ海上出現と云尤佳景の地なり神
奈川の臺より眺望すれバ絶壁ハすなハち此社の右にて
裏手に聳立すれバ其の巨巖ことごとくなれども巖頭數株の松梅
鬱蒼として榮茂せり 本牧の地ハ小田原北条家の分限帳に左衛門太夫領する由見えたり此地ハ凡百貫文同橋本五十貫文を領すとあり

吾妻明神社　同所六町斗南の方原宿といふにあり相傳ふ
天和年間此地の獵人吉太夫といへるもの此海上に網を投
じて當社の神躰を得たり木像にして雛の貌に髣髴たりと云依て小祠を
營建すと云此神躰ハ又南總木更津吾妻明神の神
像なりしが浪に漂ひ此地に止まるものといふ祭神ハ人皇十一代
垂仁天皇の皇子日本武尊初の御名をは小碓命と申奉る
武藏相模の際に尊の東征御經過の地なるをもって所々に

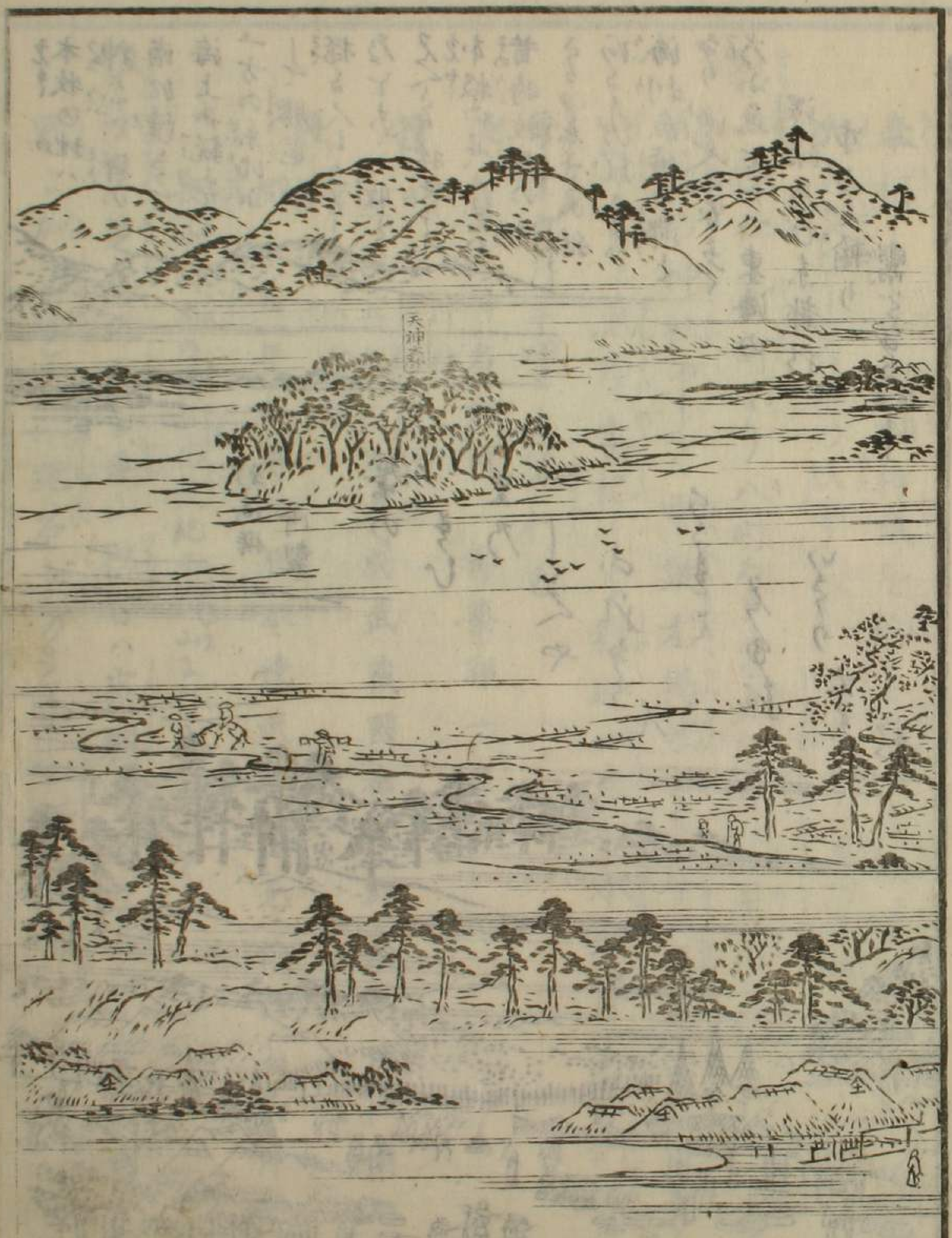
門 4 3605 6
昭和十九年四月五日寄贈


安房
上総
横濱
姥嶋


横濱辨財天社
本牧

芒村
姥島
此地よりも海苔を産
もとめくとも
品川ニ増らすと云

本牧塙（ほんもくのはな）
十二天社（じふにてんのやしろ）


天神

本牧（ほんもく）
吾妻権現宮（あづまごんげんぐう）
本社

奉祀して千歳御神威を仰き奉るも鎮護國家の盛功末代に及ぶべしのみの故なるべし 詳なる事ハ本所吾嬬森の下に出るゆゑここに略せり

杉山神社 新町より八町あまり北の方下星川村にあり延喜式内の神社にして靈蹤尤掲然たり 今ハ日蓮宗法性寺といへるもの兼帯奉祀して釋迦如来を本地佛とせり 例祭ハ毎年六月十四日に修行せり

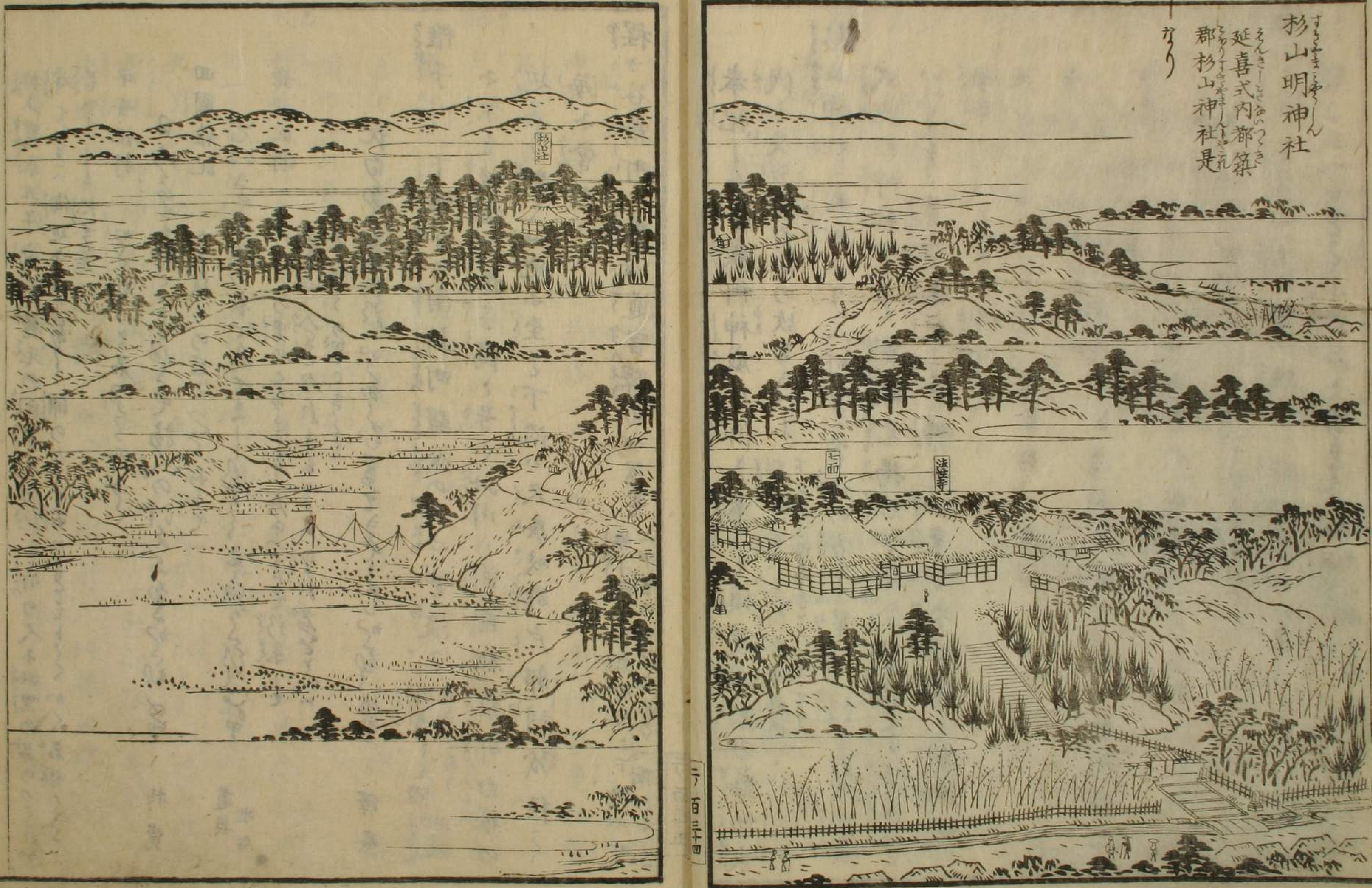
延喜式神名帳曰 都築郡一座小 杉山神社

續日本後紀第七曰 承和五年二月庚戌武蔵國都築郡杉山神社預之官幣以靈驗

同書曰 同十五年五月庚辰奉授武蔵國无位杉山名神従五位下

按ずるに刊本の續日本後紀に杉山を作る誤なり

帷子里 芝生の南に並ぶ 往古ハ宿驛の名なりしか今ハ程ヶ谷驛に加へられて小地名となれり 此所を下帷子と名け岩間神戸の南にあるを上帷子といふ



杉山明神社

延喜式内都築郡杉山神社是なり

称す寛永五年齋藤徳元の関東下向記に所の人に此里の名のゆゑを尋ねしかバ海辺にありし浦のなごりなりとて かく名付けたると答へしよし記せり

平安紀行 かたびらと名つくる所にて
日はあつしかたびらきても旅人の汗にぬるゝかたびらの里 持資

回國雑記 かたびらの宿といへる所にて
いそぎつる旅の衣をたちてまし風ふきわたる此里 道與准右

鎌倉記行 かしこの里のならひより なにつけて名をかたびらといふそこの里は名をとくは かたびらの里ときゝて
此白なる衣のひもはいつなむ夏そきてふむかたびらの里 澤庵

帷子川 下帷子の南新町驛舎の入口を流る 川幅十五間あり 此流に架を板橋と帷子橋と号く 此川ハ同國都築郡白根の辺より出て此地に至り下流ハ久良岐郡戸部村を経て海に會す

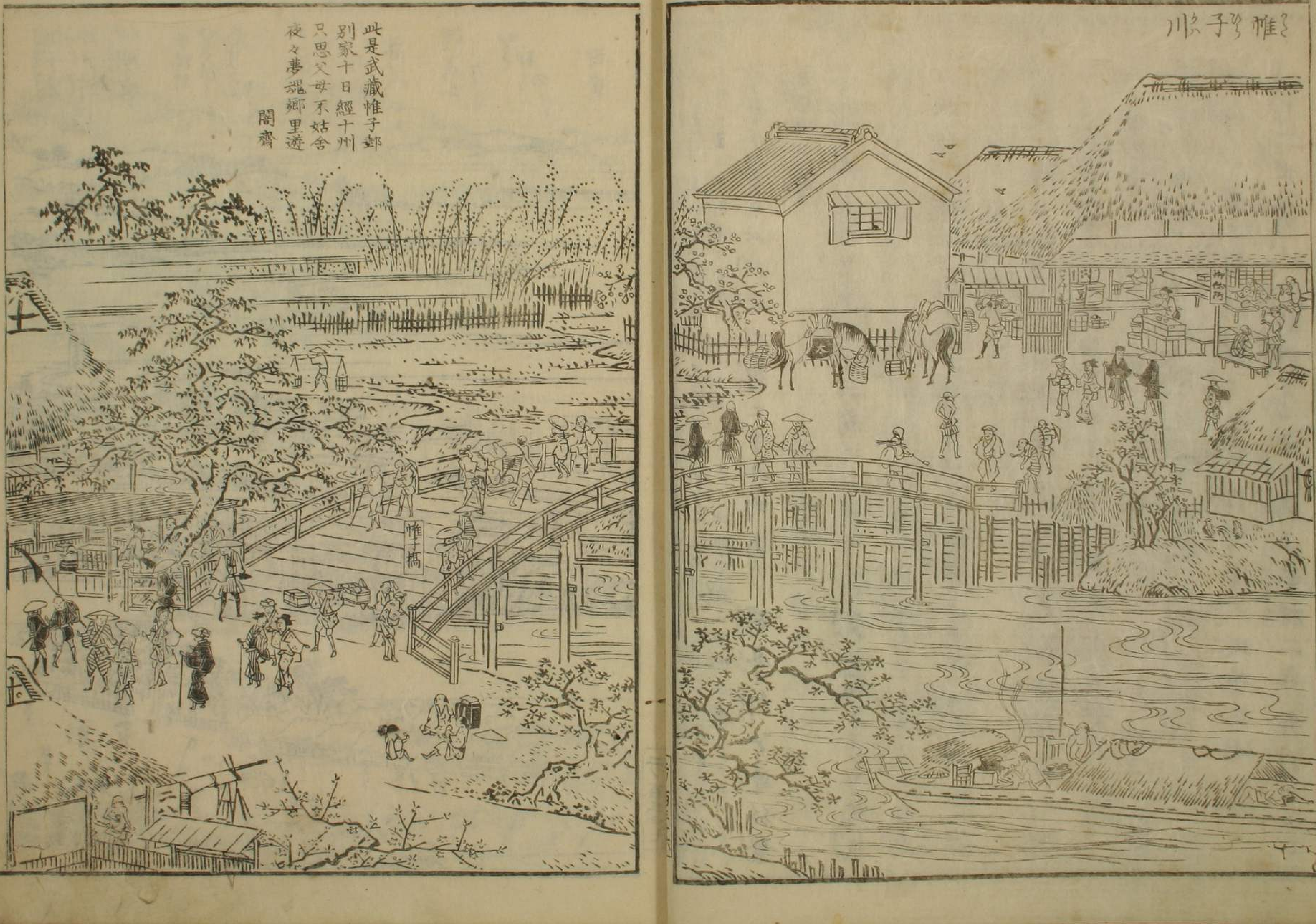
程ヶ谷新町 東海道官驛の一なり 帷子町上下 岩間町上下 神戸町 上下驛の地を合せて一驛とせる

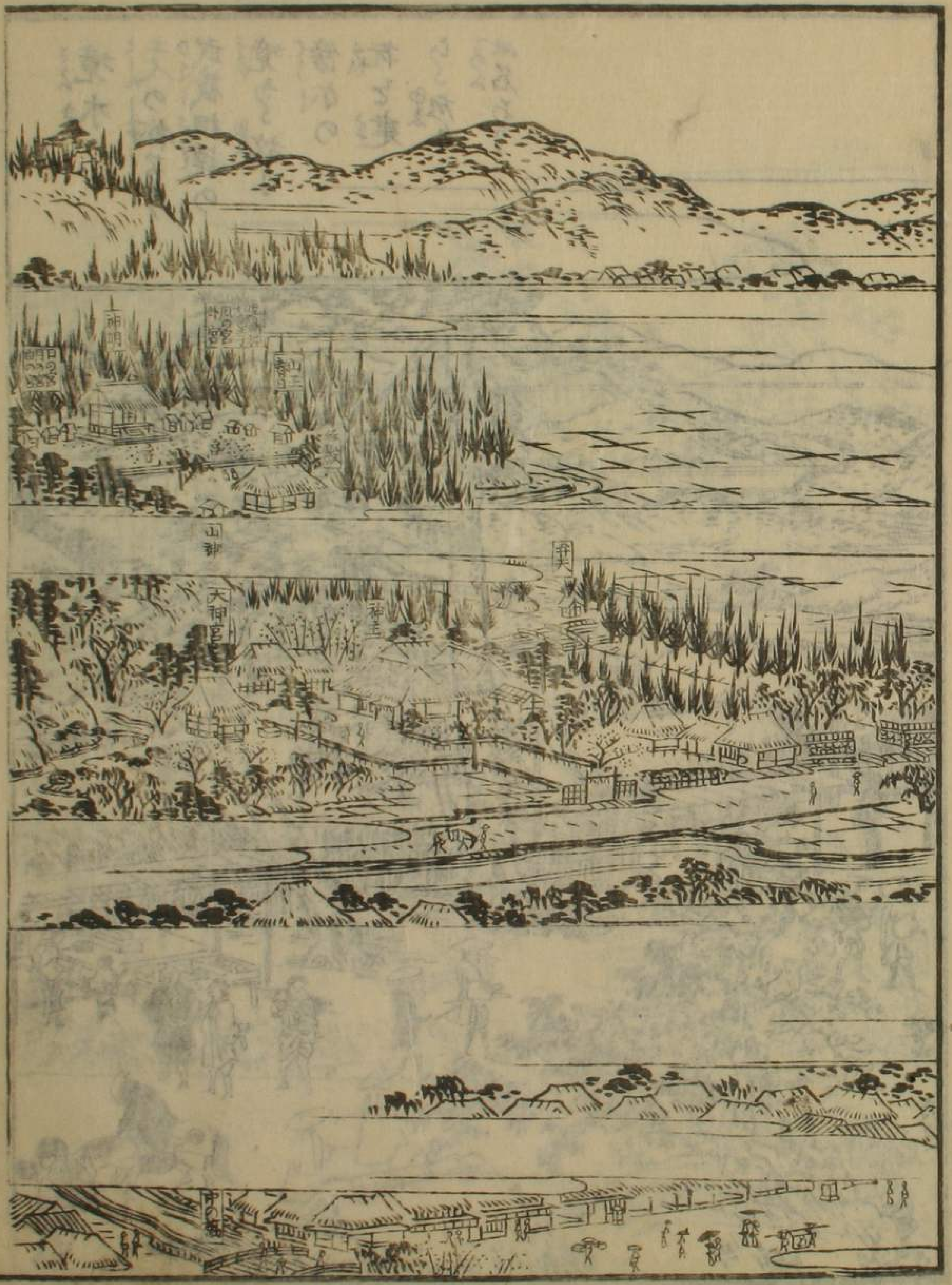
或ハ慶長或ハ慶安二年と称す又ハ万治年間ともその説一ならず 三郎と云人の所領に小机の保土ヶ谷とあるハ此地を昔ハ小机に属しけるとあかし

神奈川よりも此地迄行程二里九町あり 驛亭軒を連ね繁昌の地なり

神戸川 神戸と上帷子との間の小川にて長二間ばかりの板橋を架したり 神戸橋と号く 土人ハ中の橋と称せり 水源ハ田間の水落集りて流れをなし新町より右の裏を流れ此地に至り末ハ神戸岩間の左の裏を回りて帷子川に入る

大神宮 神戸の地にあり街道の右側に鳥居を建つ大門三丁あまりを入て社あり 神主岡田氏奉祀す祭礼ハ六月九月両月の十六日なりしを九月を大祭の辰とせり 相傳ふ往古當社の御神武州御厨庄榛谷峯に影向ましましを後世川井二股川程ヶ谷宮林同所八坂等の地へ遷しまゐらせたりしが神託あるを以終に嘉禄二年九月十六日


帷子川
此是武藏帷子邨
別家十日經十州
只思父母不姑舍
夜々夢魂鄉里遊
闇齋
帷子橋



帷子里（かたびらのさと）
神戸村（かうどむら）
神明宮（しんめいのみや）

平安記行

かたひらと
名有ら和
かく
日盛を
かさねて
ぬきて
旅人の
汗にぞ
なる
かたびらの里

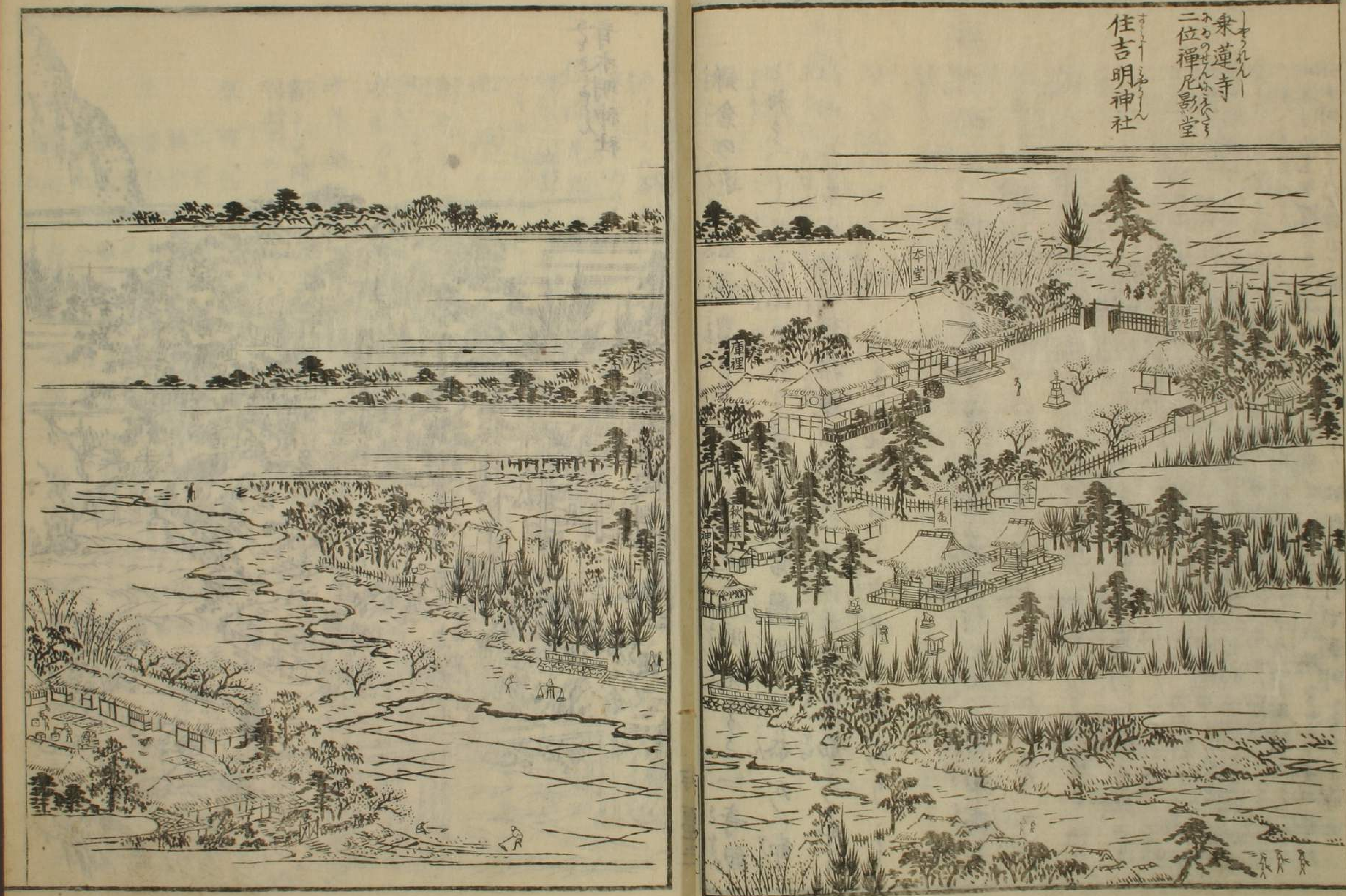
持資

境木
土人の称なり
武蔵相模の
境なる故ニ
傍尓の
杭を建
らる故尓
此名あり

科濃坂（しなのさか）権太坂（ごんたざか）とも云

此山上に迁し茸も又元和二年三月三日今のごとく平地へ
宮居を造立すと云　見目ハ神田春日町天神町等の地より年々當社へ新稲の初穂を持ち來る旧例とす
古町街道　芝生の追分より下帷子の右の裏通りを程ヶ谷の
元町へ出る通路をいふ行程十八町ばかりあり則古の街道
なり万治二年（或ハ慶長或ハ慶安とも云）今のごとく通路を改られしより裏
通りを古町街道と称し今の驛舎を新町と名づけしなり
帷子橋造畨の路ハ此古町街道と往還の通路とを
界木立場をいふ道より右ハ武蔵相模の國界の傍に杭
建るかゆへに此称あり此地牡丹餅を名産とす是を製する店
両三家あり
品野坂（或ハ信濃又科野に作る）俗に権太坂と呼も此地ハ武相の國界なり
坂路の両傍ゆゑ蒼松の老樹左右に森列すも坂上よりく
右を望めハ芙蓉の白峯玉をけづるがごとく左を顧みれば
鎌倉の遠山翠黛濃やかにて実に此地の風光また一奇観
と称すべし　春日山日記に謙信鎌倉鶴岡社恭乃節
江田稲毛小机小杉権現山品野坂杯云海道筋さかし
この砦を討敗とあるハ此地のことを中世小塁なりし
なるらん

蒔田城跡　新町より金澤通道蒔田村の内蒔田橋と
いふあり東南の方五町計を隔て道より左にあり土人ハ
城山と号く　封域東南ハ一町半計南北ハ二町餘もある
小丘なり　往古吉良左兵衛佐義門此地に住す　此地ハ久良岐郡に属せり
と云　小田原記に永禄十年武田信玄小田原を襲んとする時八王子筋へ信玄の舎弟武田孫六入道逍遥軒と四郎勝頼発向あり小机へハかゝらずして行倉
神大寺といふ山を筋違にゆくと云所へ出張をこの辺に蒔田吉良殿
左兵衛佐居住なり左兵衛佐ハ其頃大橋山城守康忠北見明頼ハ加賀守満頼杯相
具しく小田原にあり此吉良ハ北条氏康の妹婿にて其項青木と妻ハ蒔田にあり折節
人数もなけれハとかく多目周防守といふ者中くも妻女ハ居住
此妻女の宅を焼せて八生くれなきも我構をもて栗田藤左衛門
云同心と士を連れて蒔田を守護しけり軽部豊前守泰則をりふし蒔田に


乗蓮寺
二位禅尼影堂
住吉明神社
本堂
庫裡
拝殿
本社
秋葉

ありしかハ谷吉良のやしきの前なる山かのかりて鉄炮をうちけれハ敵を
来らをとあるも

二位禅尼影堂 井戸ヶ谷村乗蓮寺とのふ 西光山と号く古義真言宗石川宝生寺ニ属す
本尊不動尊なり慶安二年朱章をのふと云
真言宗の境内佛殿の側にあり 相傳ふ此
地ハ禅尼分領の地にして尼公の生前自影堂 座像 尼公の肖像ハ
等身なり四十計の齢にしくを建て乗蓮寺と号せしむる其後度々
右の手に念珠を持し給ふ
兵乱の為に破壊せしを秀誉法印勧進の功を募て寛永
十年癸酉影堂を再建し もとのまゝ八梁牌を 鎌倉志に亀谷の寿福寺に如実妙観と
書せる牌あり二位尼 の銘に詳なれ 其文左のごとし
平政子の牌なりとの

梁牌銘曰

二位尼者北條四郎時政卿息女則右大将家北方
頼家實朝両公為慈母頼朝公逝去後經二十六年
嘉禄元乙酉年七月十三日卒法名如實世人号尼
将軍是也井土谷郷依為尼公分領存日立影堂号
乗蓮寺雖然度々為兵乱破滅今秀誉法印廢■■
■他力令建立者也
奉造立鎌倉二位尼御影堂一宇國土安全求願成
辨依

寛永十癸酉年三月十一日

大檀那間宮産次郎忠次

別當 来蓮寺 秀誉

東鑑脱漏曰嘉禄元年乙酉七月十一日庚午丑刻二位家薨御六十九歳是前右大将軍之後室二代将軍母儀也前漢之呂后同而令執行天下給若又神功皇后令再生令擁護我國皇基給歟云云十二日辛未霽寅刻二位家御事有披露出家男女済之云云

按に當寺棟札の銘に二位禪尼逝去の日を嘉禄元年七月十三日とも東鑑脱漏七月十一日とするを以て證とすべき歟

瑞應山弘明寺

金澤通道より十四丁許右の方へ入て弘明寺村にあり坂東順礼札所の第十四番目なり當寺を弘法大師開創の佛刹なりとて中興を光慧阿闍梨と号古義真言宗石川宝生寺に属せり毎年七月十日十二月十八日市立て大に賑へり

東鑑曰治承五年正月廿三日於武蔵國長尾寺并求明寺等者以僧長栄可致沙汰之旨被定下

源家累代祈願所也云云

本堂 本尊十一面観世音菩薩 行基大士一刀三禮にて彫造ありと云 荒木横削長六尺の立像也

佛龕背面銘曰 中興光慧阿闍梨注

荒木作表本有横削横度十方立像堅救三世長六尺約六丈十一面顕果地各行基示深旨也

天満宮 本堂の内右の脇壇にあり昔浪華の旅客某菅神の像一躯を携へ来りて是を售むと欲すれとも買人なしと云寺主喜躍して其價を求むといへとも旅客笑て云く我有縁の地に置て世宝とせんやと辞し去て其方を知らす當寺の鎮守と崇めしに此のち中院前内大臣通茂公の御門葉若氏某此地にありて神と祈りし和哥の返しありて大に感應をあらはし因て神慮を謝しまつらんために神殿造営せしとなん

額 瑞應山 弘明寺 蓮花院 本堂の向拝に掲る 大角信勝筆

熊野権現祠 本堂の左の方にて山上にあり往古行基大士此地に至りし時霊告ありし神靈を祀る其白狐に跨るものを稲荷として鳥不乗といへり猶此縁起の下に詳なり

熊野権現とする由縁起に

麻耳山 熊野祠より上の山をいへり土俗奥の院と号す往古弘法大師護摩壇の旧跡と称し阿伽井あり按に此縁起に弘法大師勤行の地と記せり

弘明寺（ぐみやうじ）
観音
本堂

鯨鐘 堂前右の方坂の上にあり旧鐘ハ弘安九年九月廿五日鋳治のものにて願主法印長慶と云名を注せり今の鐘ハ寛政十年に改鋳せり

七ツ石 神変奇異の霊石にして自ら現れ自ら没る人恒に其在所をしらずと云若堂舎破壊に及び修理の力をうしなふ時ハ図らざるに此石現れ出る然るときハ林藪金銭等涌がごとく輻湊のつり頃年御堂の再営を企つるころ同郷檀家の庭中より出たりと寺僧喜びて当寺境内に安す尚霊石の徳を全くしらしむ由使りん不日に工匠の資財をぬく果して明和三年造営の功をとげ是に霊験集りて此石今二王門の傍に二ツあり又最戸村といへる地にも一ツを移し当寺表門の前耕田の中にも一ツありて共に四ツハ今猶見ゆれども其餘の所在ハしれずといふ

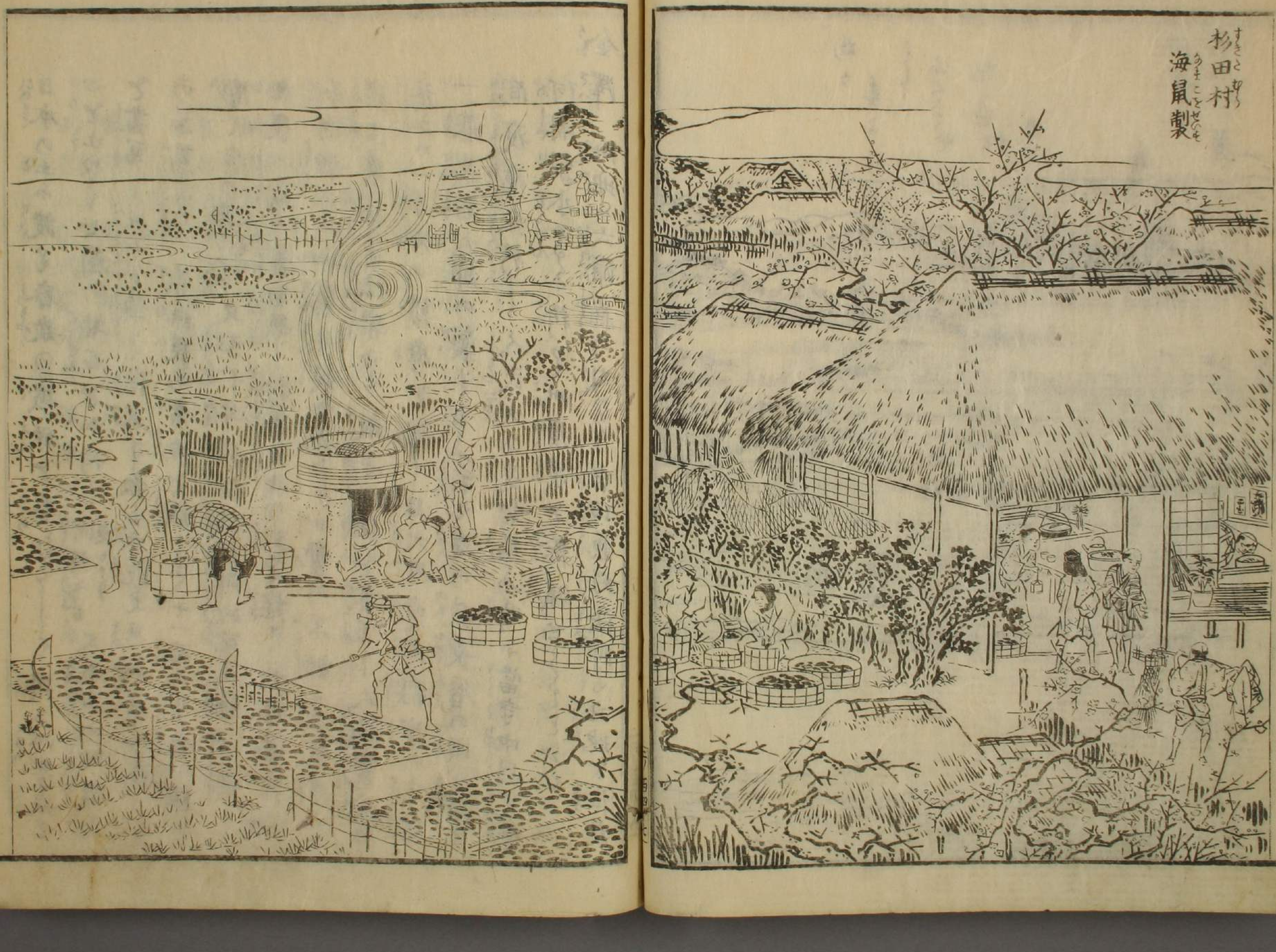
二王門 石階の下にあり金剛密迹の両像ハ運慶の作にして各九尺餘その木像ちり額に瑞應山と筆しるすは佐々木玄竜の書なり

小田原北条家制札 永禄十年丁卯十月二日 石巻彦六郎 書とあり

同寺領寄附證文 天文二年癸巳二月十八日 石巻勘解由左衛門 書とあり

本尊縁起曰人皇四十五代 聖武天皇の御宇行基大士東國遊化の頃此地に至りたまふに空中に白蓮乱飛して山上より散墜を大士怪みて山に登りたまふに果して神人のあらはれ一ハ白狐に乗じ一ハ霊鳥に乗る 今境内に鎮座の熊野稲荷等の両神是なり 各大士に告て曰く去る養老年間印度の善無畏三蔵遠く我

杉田村梅園
すぎたむら うめその
鋸山
房州
蓼太



杉田村海鼠製

日本の土ニ渡るも密教の機縁を要むとしく終ニ此地ニ来る
心を止めくく七箇の蟠石を加持し所謂七ツ石是なり又其石ニ陀羅尼
を書寫し此山ニ鎮く結界しぬと云訖て其行方をしらす
あるニ於て大士善無畏の素懐を鑑みくく十一面の尊像一軀を
彫こゝめよ當寺の本尊是也又弘仁年間弘法大師此地ニ錫を飛し
無畏三蔵の舊を興し行基大士の跡を継く大悲者ハ浄
刹を𣃥めよ伽藍安鎮の為ニとて四臂の不動尊ふを作る
密教擁護神の法樂ニとて般若心経を書写し人法繁栄の
為ニハ一千座の護摩を修し且大黒愛染[illegible]字の宝塔
一基是皆大師の製しあへふ所遂の後長暦の頃武相の
間疫癘流行し人民大ニ是を患ふ時ニ當寺中興光慧
阿闍梨本尊ニ祈りて此疫災を除滅せしめしと云く
此地ハ六浦荘の内なり吉田兼好法師も此地ニ住れ

金澤

しりしより家集ニ見えくり尭恵法師の北國紀行ニも神興
絶妙の勝地なりと称せられくり往古巨勢金岡此地の勝
景を摸し盡むとし及ハさりしく筆を投し嘆賞せし大明
心越禅師ハ其佳景西湖ニ似くるをもて其八勝ニ準擬し
八詠の詩賦あり

洲崎晴嵐
滄々縣浪斂餘暉滾々狂波遠竹扉市後日斜人
静悄行雲流水自依依

瀬戸秋月
清瀨消々不繫舟風傳虚籟正中秋廣寒桂子香
飄處共看氷輪島際浮

小泉夜雨
暮雨凄凉夢亦驚甘泉洞々聽分明蓬窓淹蹇無
相識暘浙君山鐵笛聲

乙驢歸帆
朝宗萬泒遠連天無恙輕帆掛日邊欵乃高歌落
雲外依稱數艇到洲前

稱名晩鍾
凮背名藍成覚地華鐘晩和若鯨音幽明聞者感
生悟一片迷離祇樹木

平瀉落雁

能見堂
擲筆松

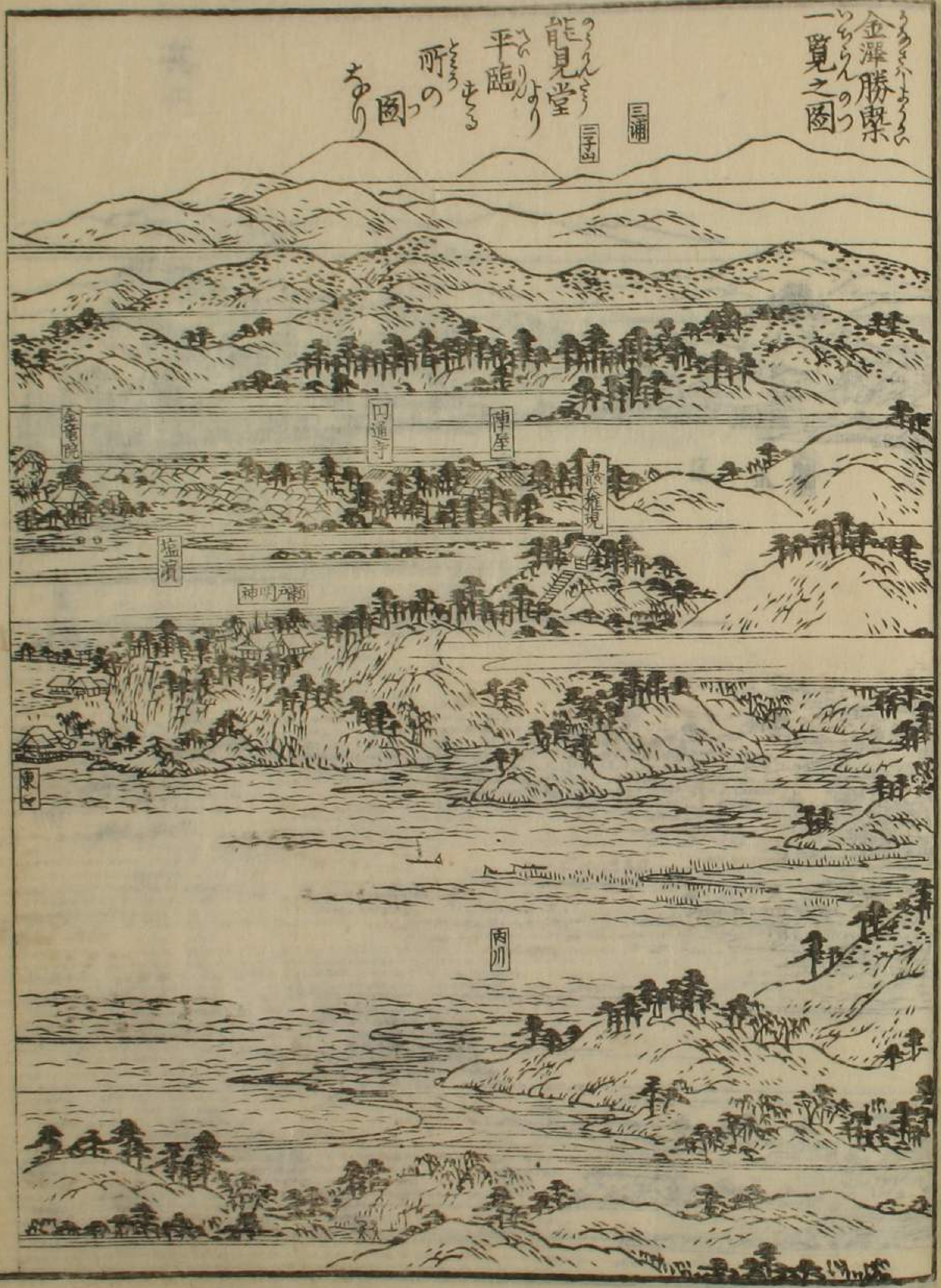
此所より金澤の勝槩を平臨する圖ハ次に挙り

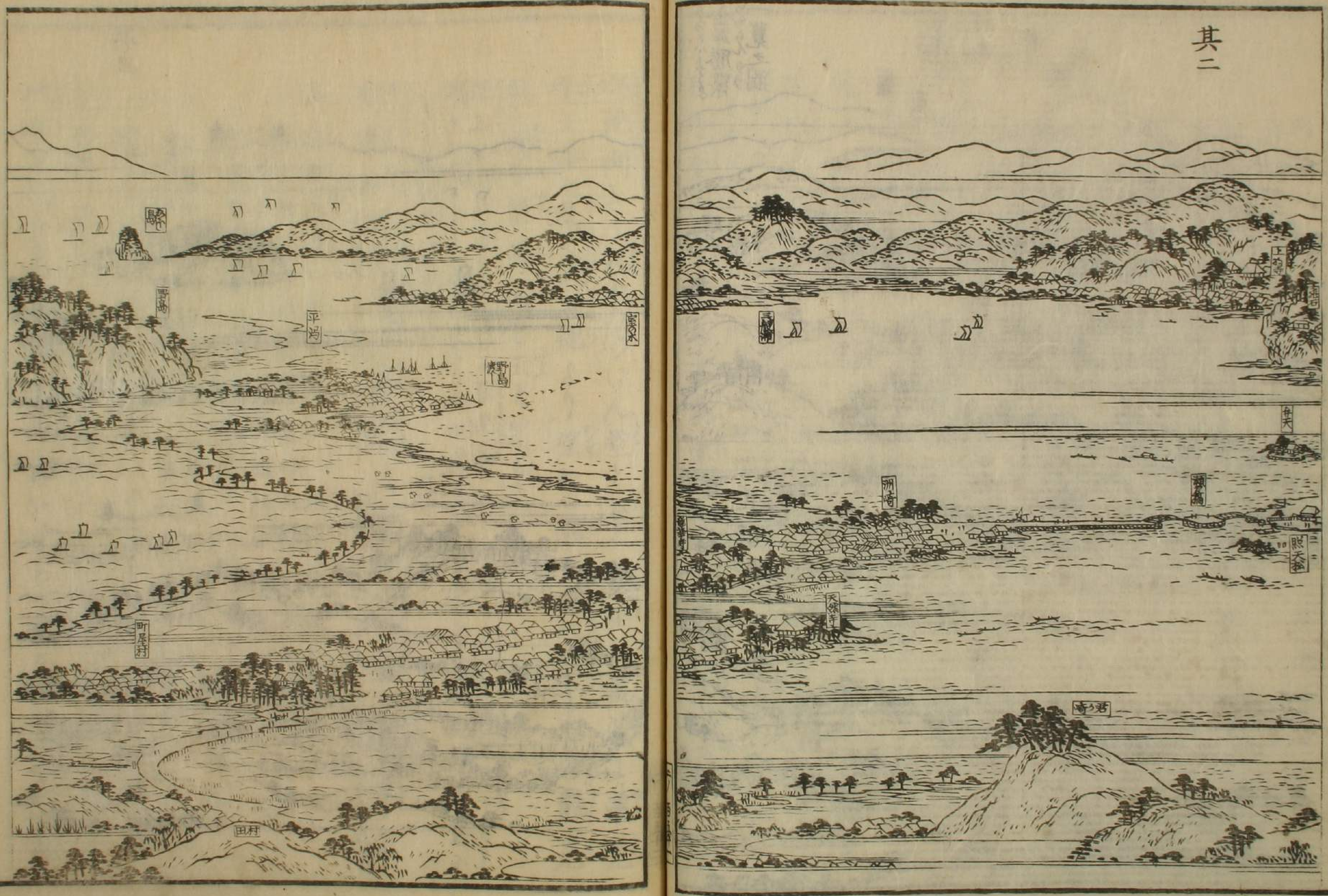
涼しさや折ふし是ハと筆擲松

西山宗囙

列陣冲冥堪入塞荻蘆蕭瑟幾成隊飛鳴宿食悳
棲進千里傳書誰不愛
廣内川暮雪竟没潜奇花六出以鋪縺渾然王砌山
河色遍長堤覆危峯露些尖
野島夕照
獨羡漁翁是作家持竿盪槳日西斜網得魚來沽
酒飲披簑高臥任堪誇
武州金澤郷筆山能見堂有蕭𢮦八景之風味因觀
鎌倉志甚詳一夕寥々對青燈漫賦八景之陋句以
識斯勝境云歳執徐夏日
東皐越杜多艸

能見堂 金澤稱名寺の艮の山上にありて禪宗洞家の草庵なり
本尊の地蔵ハ恵心僧都の作にして一寸八分有りと云
後世立像二尺五寸計の地蔵菩薩を作りて靈像を八
其胎中にこめたりと云 故に此草庵を地蔵院と号く今の堂宇ハ
近世久世和州侯源廣之建立ありけるとぞ 擲筆山及ひ
能見堂等の二ツの額ハ共に心越禪師の書なり 相傳ふ昔畫工
巨勢金岡なるもの其真景を写さんとし筆抛及ハさる戓




其二
平潟
野島
町屋村
洲崎
弁天

以絶倒とあるハのつけん堂と云と梅花無盡蔵に濃見堂に作る或人云此地より望めハ瀬戸の八勝まで皆能見ゆる故に能見道と云といへるも澤庵和尚のかゝれたる紀行に能見堂の松と云に立よりて金澤を見下せと詞にも及ぶなりしを記されたりまた地蔵菩薩を本尊とする故六道能化の意によりて能化堂にハ作られなりしをとあり

擲筆松 堂前に存せる和の大松をいふ巨勢金岡此地の勝景筆にも及ひかたきをなげく此樹下に筆を投しよりしかして此号ありといへり

梅花無盡蔵 出金澤七八里許攀最高頂則山々水々面々之佳致昔畫師金岡絶例擲筆之處有名無基但其名不甚佳相傳曰濃見堂也中畧又云畫師擲筆之峯云云

登々匍匐路攀高　景集大成忘却勞
秀水奇山雲不裏　畫師絶倒擲秋毫　萬里居士

凉しさや折ふし是ハと筆擲松　西山宗因

ゆりそふに筆擲松乃吟　仝

此地に至るまで金澤の勝景を望めハ畫にかくごとく南より西

北はめぐりて皆山ゆかしく東ハ滄溟に連なり千里の風光窮りなく沖行舟の真帆片帆ハ雲に入かとあやしまる瀬戸の神祠ハ水に臨ミ称名の佛閣ハ山に傍へり漁家民屋ハ樹間くにみえかくれし島嶼ハ波間くにあらはる又鯱戸の烟潮水の盈虚も皆此擲筆松の下に平臨せられやしく一瞬に遷て一日早晩の異なる一年春夏秋冬の変まる千態万状極りなく闌左の一勝地なれバ高人を松島象潟の風致あるを以雅客遊人留連時を移さざるへしとも其十が一を究る能はず

金澤山稱名寺 町屋村にあり弥勒院と号す真言律にして南都の西大寺に属せり當寺ハ亀山帝の勅願所なりしが北条越後守平實時の本願其子顕時の建立なり 實時を称名寺と号し又法名を正慧といひ此地に居住せる顕時より金澤を家号とす 顕時法名を慧日と号せ霊牌に弘安三年三月二十八日に卒すとあり

本尊弥勒菩薩ハ唐佛なりしく立像五尺五寸あり傍に運慶の作の地蔵尊の木像二躯を安ぜ開山ハ審海和尚と号す

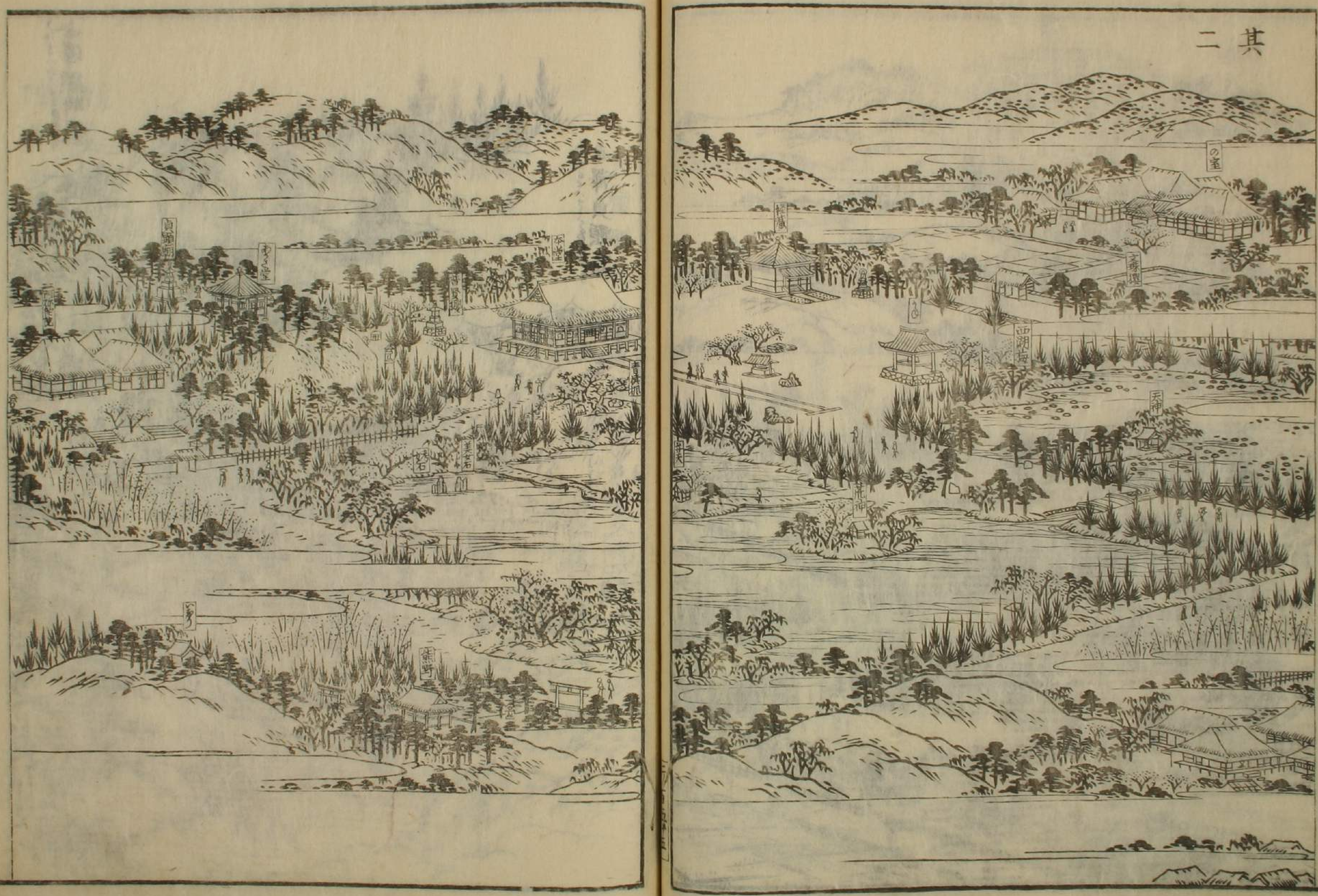
小田原北条家分限帳に金澤称名寺領金澤に伏せとあり又氏綱の三男鄰寺王所領の内に金澤称名寺分とある地を注し加へたり

愛染堂 本堂の西にあり本尊ハ獅子にしく三寸許ありとの鎌倉志に弥勒堂とありく此堂に一切経を収蔵せしと見えたり當寺元亨三年大結界の図に三重塔と注しあり道興准后の回國雜記に称名寺といへる律院をくもことの外なる古寺にて伽藍あともさりぬつきさぬる所へ順礼し侍りて三重の塔婆ばかり残りて侍るに老僧は行あひぬとあるも此塔のことを記たるへし又澤庵和尚の鎌倉記行にも本堂一宇あり諸堂皆跡ありとあり五重の塔も一重にありぬとあるもまたこの塔のことなるへし

鐘楼 本堂の東にあり 其銘に云く

大日本國武州六浦荘称名寺鐘銘
降伏魔力怨除結盡無餘露地撃犍稚菩薩聞當集
諸欲聞法人度流生死海聞此妙響音盡當雲集此
諸行無常是生滅法生滅滅已寂滅為樂一切衆生
悉有佛性如来常住無有變易一聽鐘聲當願衆生
断三界苦顛證菩提
文永己巳仲冬七日奉為先考先妣結縁人等同成
正覺鑄之

称名寺
しやうミやうじ
観音
光明院


其二
西湖梅
天神

大檀那越後守平朝臣實時 實泰 亀ケ谷禅尼

入宋沙弥圓種述

宋小比丘慈洪書

改鑄鐘銘并序

此鐘成乎文永甔半正應寺而不可無鐘矣因勵微力并募士女更捨赤金重營青鑄若也伏乞先考超越三有同德於寶應聲逍遙十地並位於光世音聖乎四生九類與千一種餘響銘曰

洪鐘之起　其始郷焉　載干周典　称于竺篇
質備九乳　形象圓天　聲之觸處　聞々入玄
三界五趣　八禪四定　醒長夜夢　驚無明眠
之朝之夕　無愚無賢　凡厥聽着　同見金仙

正安辛丑仲秋九月

大檀那入道正五位下行前越後守平朝臣顕時

法名慧日當寺住持沙門審海行事比丘源阿大工

大和權守物部國光山城權守同依光

金澤顕時墓 當寺大檀那なり阿弥陀院後の山の中腹にあり高さ七尺餘ての五輪の石塔なり

同貞顕墓 同所下にあり顕時の子なり石塔ハ五輪なり高さも前ト同し程なり

美女石姥石　とともに池中橋より西にあり　四石と称するものゝ其一なり　金澤

青葉楓樹　称名寺堂の前鐘樓の傍にあり舊樹ハ枯て今弱木を栽たり　金澤八木と称するものゝ一なり謡曲にも是を作れり

北國記行　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　堯恵

金澤にいたりて称名寺といへる律の寺あり　むかし為相卿の
いつかたく此一本は時雨もむかしにさきたつ青葉のことにも [illegible]
と侍りしより此木青葉の楓と [illegible]
此比ある楓樹 [illegible] 佛殿の [illegible]
さきく[illegible]ハこの記にも残りしとかくたえたる時雨の青葉なる [illegible]

東國記行　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　宗牧

[illegible]
為相卿 [illegible] 一室 [illegible] 御佛 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible] 世の秋此 [illegible] 一本の色の白 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

鎌倉記行　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　澤庵

秋もいまだ青葉に白みも乃 [illegible]　全
池のほとりに一本のかへでありけりへ為相卿 [illegible]
いつかたく此一本の時雨 [illegible] 青葉の [illegible]
[illegible]
[illegible]

西湖梅　この梅同じく鐘樓の脇にあり花ハ八重瓣にして潔白なり　種類のまれなるを是も八木の其一なり

梅花無盡藏曰

貼西湖梅詩序

丙午小春余入相州金澤称名律寺西湖梅以未開
為遺恨冨士則木邦之山而斯梅則支那之名産也
唯見蓓蕾而雖未見其花豈非東遊第一之奇觀乎
哉金澤盖乇代好是叓之主属南艄移枕州西湖之
梅花於称名之庭背以西湖呼之余作詩云前朝金
澤古招提遊十年逢雖壁膌梅有西湖指枝拜未開
還恨翠禽啼及今餘恨未畫巨福山有識面丁未之
春摘其花數十片爲一包見惠焉己酉夏五余飯濃
之舊廬奉献彼一包於春澤梅心翁之借余手措技
條貼其花近而見之則造化所設遠而見之則趙昌
所晷并以出於春翁之新意实掛高堂一日招余令
觀焉之次要作贅語題軸上漫從揚水之來章云

西湖梅貼軸詩

萬里居士

六浦称法日荷上人
称名寺の住僧と
戯に碁を圍て彼
寺の二王尊を
賭物とせ
られハ終に
上人勝たり
これを負て
甲州身延
山へ至られ
けりしと云
大力無双の人
なり

前朝金澤古招提　遊十年遅雖噬臍
梅有西湖指枝拝　未聞遺恨翠禽啼
仝
一横枝上粘西湖　名字斯花別不呼
意外春風眞假合　傍人定道盍成圖

櫻梅 同所にあり花ハ重瓣なり八木の一員なり

文珠櫻 同所にあり普賢象に對しての名なるへし共に八木の一なり

普賢象 本堂の前左の脇にあり一品にして怡顔齋の櫻品にもえらへり

一室 鐘樓の後にあり門に一の室と書せし額を揚く今ハ荒廢せり澤庵和尚の鎌倉記行にもいちの室とのへて萱ふかく寂寞無人さるかそのかミの房くもあるへきかく人の跡とおもひもせすなく声のともをとち坐禅観法の床を忘れてる事に似たりとありて寛永乃頃も荒たるさまなりし

阿弥陀院 本堂より左山の傍にあり称名寺の寺をつくされり

二王門 樓門の左右に安置せる所の金剛密迹の像ハ運慶の作なりといふ此二像ハ杉田村東禅寺にありしを此に遷せるなり當寺旧の二王尊ハ六浦の荒井平次郎光吉出家して日荷上人と号せしか上人或日称名寺の住侶と碁を圍て二王を賭とせ終に日荷上人勝ちけれハ當寺の二王の像をゆるく身延山へ遷されけりとそ六浦上行寺に其二王の像の玉眼なりと称する五寸あまりの玉を傳へり

熊野新宮 池の西岡の上にあり當寺の鎮守なり

寺寶　佛舍利 八祖相承の舍利と号して代々に傳ふ弘法大師大和國室生山に納置たりしを亀山帝の勅により

當寺へ移し納るとかや昔ハ弥勒佛泥塑像長三寸座像ふして弘法大師の作なり勅封ありしとなり

亀山帝の御念持佛なりしと云傳ふ

愛染明王金銅像 吉備丸の作なり

請雨経 瑜伽論

共よ菅丞相の真跡の瑜伽論ハ長二寸五分一行よ二十五字あり此論ハ一部百巻なりしを十巻よ書つめらる餘ハ鎌倉の極楽寺よ三巻同荏柄天神ふ二巻紀州高野の金剛三昧院ふ一巻江州竹生嶋よ一巻以上合せて八巻ハ今尚存せりとぞ其餘の二巻ハ所在しれざりし鎌倉志よ見えたり其外古佛多く枚挙するふ遑あらん

大界外相圖 元亨三年當寺结界の図なり其光景尤大厦高堂ふしく古の繁昌のほどしるく今ふ異なり其裏書の抜よ云

元亨三年癸亥二月廿四日

羯摩師極楽寺長老忍公大徳

答法 多宝寺長老俊海律師

唱相 湛睿

當寺本願越後守實時及ひ顯時貞時貞將等の画像の懸幅あり

楊貴妃玉簾一連 初尾州熱田よありしを亀山帝の勅ふより當寺ふ収らるとぞ硝子の細き竿を色絲ふてあミたるものなり

梅花無盡藏曰金澤称名律寺開西湖梅以未開為遺恨矣珠簾猫兒支竺群書之目録無介若而不能融目云云

注曰称名寺水晶簾唐猫見之孫一大時敎文郡書

蓋先代貯焉

又曰寺祕件々之物容易元使人看之也

四國雜記

それ簾の長さ三尺四寸ひろさ四尺斗ありて水精の[illegible]古の感緒今更[illegible]人

[illegible]

道興准后

北條陸奥守制札

金澤阿弥陀堂称名寺領敷地并垣墻等之事

右於當所軍勢并甲乙人等不可致濫妨狼藉若於令違犯輩者為被處罪科可被注申交名之状依件

執達如件

康安二年五月廿四日

陸奥守（花押）

永享十一年称名寺領結解状

註進

稱名寺領赤岩十四ヶ村御年貢錢（永寛十）結解状事

合八十貫文内

六十九貫六百文　寺納

八貫文　代官給

一貫文　徳妙衣料

八百文　夫領路銭（両度四人分 年貢運上時）

三百文　今津問方酒直

三百文　六浦六郎方礼儀習銭之時

已上八十貫文

右所勘定状如件

永享十一年三月三日　政所憲意判

當寺ハ北条家繁昌の昔䫌こゝる巨藍なりしかとも物換り星移り堂宇多く破壊して今ハ山圍ミ古木鬱々く松杉梢をあらそひ常ハ欝々とあり房宇ものさびて寂寞の扉を閉ち座禅観法の床をしめうるに似たり

金澤文庫舊址　阿弥陀院の後の畠をいふ（東野文集に寺前の土庫文庫の称あり）冒と相傳北條越後守平顕時営建せらる所なりとそ内に和漢の群書を納め儒書ハ墨印佛書ハ朱印を用ゆ印文ハ楷字ふして竪ふ金澤文庫の四字を注す（印章の摸形ち）次ふ後上杉安房守憲實執事たりし時再興せしかとも其後ハ荒廃して書籍散失せりとなん（丙辰紀行ふ越後守平貞顕此所にありて清原の教隆ふ群書治要を讀せらる余ろ文選清原の師光ゝ左傳教隆ゝ群書治要斉民要術律令義解本朝文粹續本朝文粹續日本紀なとのさひ其外人家ふ有あり名も一部とそのひこつまれ之一切経も取得としてのこりて今ふ金澤ふありと云く東見記云金澤文庫内ふ左傳の巻本三十巻中原師光ゝ跋ありとなり鎌倉志ふ一切経の切残りありとの弥勒堂ふありと云）

金澤文庫

印面大サ共如レ圖

金澤文庫址（かなさハぶんこのあと）
御所ヶ谷（ごしよがやつ）

鎌倉大草紙云武州金澤の学校ハ北条九代の繁昌に
昔学問ありし旧跡なり是をもと今度彼文庫を再建
しく種々書籍を入置又上州ハ上杉か分國なりけれハ
足利ハ京并鎌倉の名字の地なれハ他に異なりとて彼
足利の学校を建立して種々の文書を異國より求め
納る此足利の学校ハ上代兼和六年に小野篁上野
の國司たりし時建立の所同九年篁陸奥守になりて
下向の時此所に学校を建る由其旧跡于今残る
なるを應仁元年長尾景久か沙汰として政所より
今の所に移して建立しける近代の開山ハ快元と申禅
僧なり今度安房守公方の名字掛の地なれハとて
学領を寄進し弥書籍を納め学徒を憐愍せられ
此頃ハ諸國大にみたれ学道絶たりしかハ此所日本
一所の学校となる是より猶以て上杉安房守憲実を
諸國の人を深めさるハ申し西國北國よりも学徒悉く
集ると云々

観金澤蔵書而作　義堂

玉帳修文講武餘　遺人来見舊蔵書
牙籤映日寛蝌斗　縹帙衆晴走蠧魚
圯上一編有不足　鄭侯三万欲何如
照心古教君家有　收在胸中壓五車

慕景集

二月粉菜金澤の文庫ゆく行のかし三好日向守勝元の許よりやとされたるハ隣家梅花とらん鉢を献供すとて遣しける

まなれや物くともかくる花ハまてさも別る梅の下風　持資

丙辰記行　羅山子

懐古涙痕羈旅情　府儒早晩起蒼生
人亡書泯幾田畝　境致空留金澤名

御所か谷　阿弥陀院の後の切通を出る畠を云里俗云く
亀山帝の行宮の跡なりと　鎌倉志ニ切通ハ則御參詣の道なりしとあり

此帝勝地佳境へ遊歴のをりハあれとも此地へ御幸のをりハ
舊蹟に見えすと

兼好法師閑居旧跡　其地今志るべなし

兼好家集　武蔵国金沢といふ所に昔住し家のいたうあれたるにとまりて月あかき夜

古郷の浅茅が庭の露のうへ床ハ草葉とやとる月かな　兼好

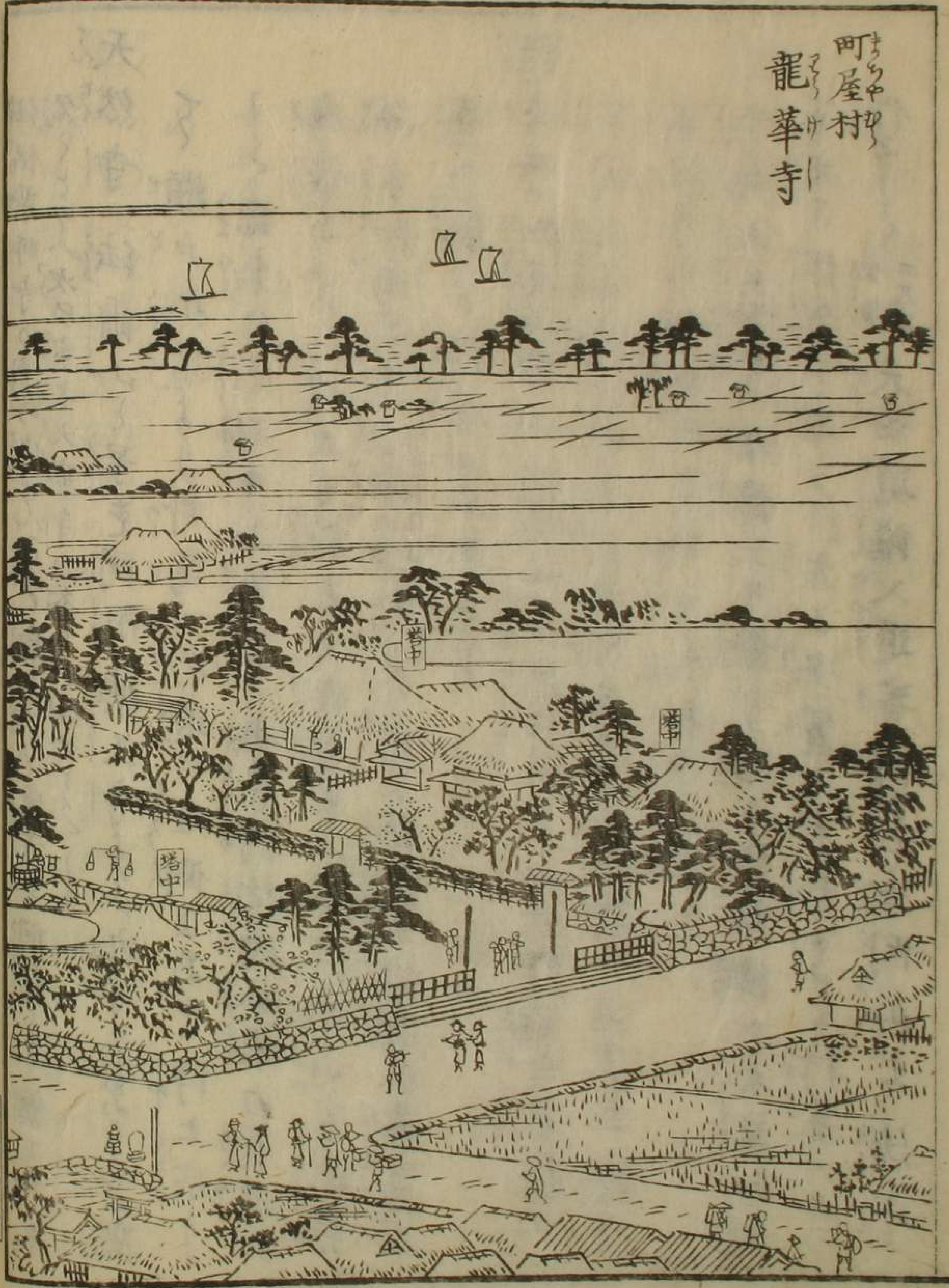
藥王寺　三療山と号す称名寺の前道より左側にあり古義の真言宗にして龍華寺に属せり本尊ハ胎蔵界の大日如来座像三尺斗あり当寺に蒲御曹司範頼卿乃霊牌あり表に大寧寺道悟禀に天文九年庚子六月十三日と記しる由鎌倉志に出るといへとも今その牌あることなし

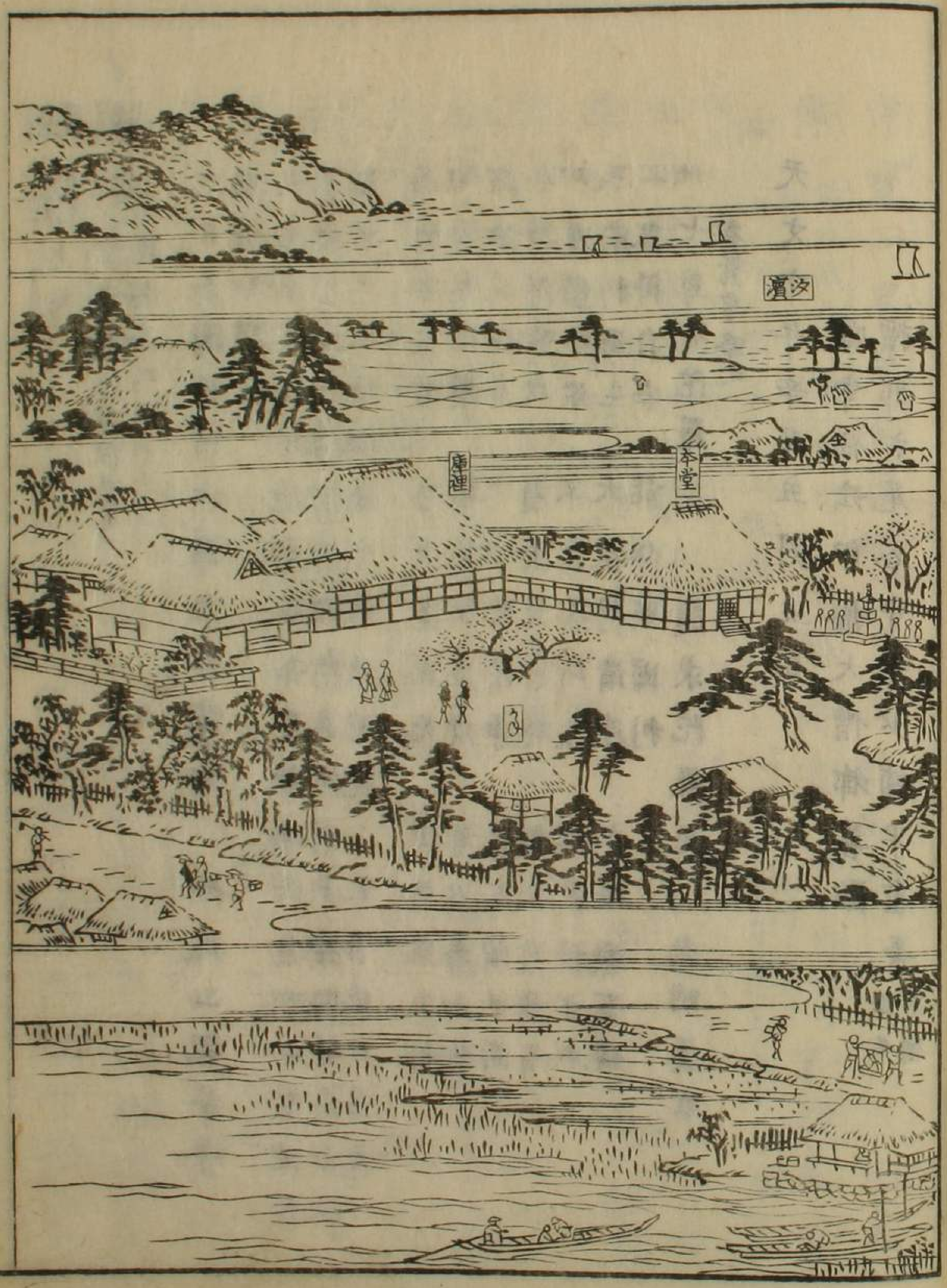
藥師堂　本堂の前右の方にありて廊をもって本尊薬師仏の像脇士十二神将の本像と共に行基大士の作にして深く龕裡に秘安しくろうふ人に拝せしむることなし当寺旧ハ薬師寺と号も室木大寧寺是なり範頼卿没して後その法号を撰く薬師寺を大寧寺と改むる故にその頃此薬師寺の号の廃せんことを歎きふたゝひ当寺を開創して薬王寺と名くとのみ次の室木大寧寺の条下を合せてみるべし

天然寺　法爾山と号も同所薬王寺より九丁あまりも隔て瀬戸街道より野島へ行道の左側にあり浄土宗にして鎌倉の光明寺に属せり本尊ハ阿弥陀如来の木仏ハ座像にして一尺五寸計あり作者志るべからず開山ハ然誉禅古和尚と号　永禄二年二月二十六日に寂す　寺宝に弘法大師及ひ恵心僧都等の画ける仏像四五幅あり

龍華寺　知足山弥勒院と号天然寺より五六町南の方瀬戸街道洲崎村と町屋村の間道より左側にありて古義の真言宗の檀林にして御室仁和寺の末也本尊大日如来ハ座像二尺餘り右に弥勒仏の木像を安す共に作者を志らず左に安置の不動尊ハ行基大士の作にして　立像二尺斗　太田道灌入道寄附せしと云　開山ハ法印

町屋村（まちやむら）龍華寺（りうげじ）





融辨と号　鐘樓堂前左の方にあり　其文左のごとし

大日本國武州六浦庄金澤鄉　知足山龍華寺

唱鐘知識文

夫滄海若鮮甲所潜泰岳者翔蹄所集則知智池者
僉塵所浴靈鐘若苦類所息然則洪鐘隆鼓焉非但
留宅王之望劍兼亦馭灰河脫三界苦得見善提

善薩勝慧者　乃至盡生死　恒作衆生利
而不趣涅槃　般若及方便　智度悉加持
諸法及諸有　一切皆清淨　慾等調世間
令得淨除故　有頂及惡趣　調伏盡諸有
如蓮體本染　不爲垢所染　諸慾性亦然
不染利群生　大欲得清淨　大安樂富饒
三界得自在　能作堅固利

卅七尊聰陀羅尼　隨求陀羅尼　光明眞言
各梵字略之

天文十年辛丑五月五日

當寺住法印權大僧都善融

檀那古尾谷中務少輔平重長（法名道傳）

寺寶両界曼荼羅（二幅）涅槃像（一幅共に唐畫 筆者詳ならずとぞ）八祖畫像（一幅弘法大師或ハ頼行の筆なりとも云）十三佛繪像（一幅中将姫の製なりと云）不動畫像（寺僧云く一幅弘法大師の筆なりと云 裱褙の裏書に太田道灌寄進とあり 天正年間御當家に於く重修なしたまひしとなり）五指量愛染明王像（一弘法大師の作と云 握の長サなり）鈴（一箇弘法大師の持物なりといひ傳ふ）鳳凰頭（二箇）龍頭（十箇共に運慶の作也といふ 二種とも木を以て製し上に金の箔を貼せり 灌頂の時幡を掛る具なり）

當寺ハ治承年間鎌倉右府頼朝公伊豆國三島明神を金澤瀬戸の地に勧請ありし後法味を進奉る為文覚上人と共に志を合せ文治年間六連の山中に精舎を創建せしめ弥勒菩薩の像を安しく都卒の四十九院に準擬し四方に六八の僧坊を建浄願寺と号庄園若干を寄らる（當寺是なり 往古弘法大師護摩修行し給ひし旧跡なりとぞ 俗呼て弘法山と云 又境内に霊泉あり）然しより殿堂甍を並へ粉壁ハ月の光を移し伽藍ハ博敞にして丹柱ハ星の林をなせり 其後正嘉年間南都の恩性律師當山に

住し戒律を弘め弘長二年中東寺の能禪法印當寺に於て灌頂を修行せしる印融僧都の附屬に依て光德寺を兼帶せしる（此寺も頼朝公の建立にして真言の靈區なりし高野山無量光院印融東遊の初此寺に住す親筆の書籍文庫にあり）充満然に数度の兵乱によりて両院の領地も他に奪れ大に荒廢せしを明應八年融辨師（大永四年甲申八月朔日寂す八十二歳）深く是を愁へ本尊の冥助を願ひれしに菅原朝臣中務丞資方力を合せ伽藍再興を企むとす時に本尊弥勒大士夢中辨師に告ありく是より艮に當て末世有縁の勝區あり彼所に移して三密の法燈を挑へしと夢覚て後其所を窺ハるに竜燈の奇瑞あり（洲崎村の境なりむかし八堂の前に数園の松あり竜燈の松と号す今ハ枯たり）竟に辨師本尊の靈示に任せ此地に至り二町四方に結界し兼帯せる和の浄願寺光德寺両院の僧坊を合せて一寺となし後土御門院の勅を奉じて知足山龍華寺と号す師資相

傳の本尊聖教を納めて善融法印に附屬す（此師ハ相州小田原の城主大森氏の末子にして龍王丸と号く師の德行を慕ひ浄願寺に入て僧となる其誉世に隠れなし依て北条左京大夫永楽銭七貫文幷柴村權現堂山を寄附す）享禄五年に東寺の寶菩提院亮恵僧正を請して傳法灌頂を受天文十二年古尾谷中務少輔平重長を檀越として洪鐘を改鋳す後太田道灌不動尊の靈像を寄附して武運延長を祈る（此不動尊の像ハ本尊の左に安ず）靈牌を置来世の追福を求らる天正十九年 御開國の後當寺を御修営ありて 御朱印を下し給ひしより四海泰平を祈念怠るなし

當寺ハ真言古義檀林一宗の本寺にして金澤に甲たり境内広く古木聳え覚樹の粧ひを示し緑竹翠の色をなして實相不変の容を顕も海水左右に湛て朝烏夕兎の影を浮へ人家前後に列て山市漁村の観をなせり

鎌倉記行
烏帽子島
沖より
あらき
澤菴和尚

浦の郷
夏島

有餘の末寺ハ林邑に散在して年〻の法會月〻の勤修
恒例に任せて怠ることなく寶祚の長久武運の萬歳を
祈る暁の振鈴の声ハ無明煩悩の眠を覚し夕の
梵鐘のひゞきハ三途の迷夢を破る實に江南の一精舎なり

善應寺 野島山と号す同所より半道ばかり塩濱を隔て南の
方野島に傍てあり真言古義にして龍華寺に属す本尊
不動明王の像ハ作者をしらず正観音の木像ハ立像二尺ばかり
あるハ聖徳太子の作なり愛染明王ハ座像一尺五寸ばかり
にして弘法大師の作と云 此像の胎中に愛染なるの小像千體を作て籠らるといへり

野島 同所東の出崎にして瀬戸橋へハ其間七八町あり土人
百軒島とも云民家百軒より餘る時ハ必災ありとて百軒島と
呼へりといふ 此所の出崎は紀州亜相頼宣卿の塩風呂の舊地ありといへり 山の出崎に稲荷の
小祠あり又中腹にも菅神の宮あり此地の北より北を平方と

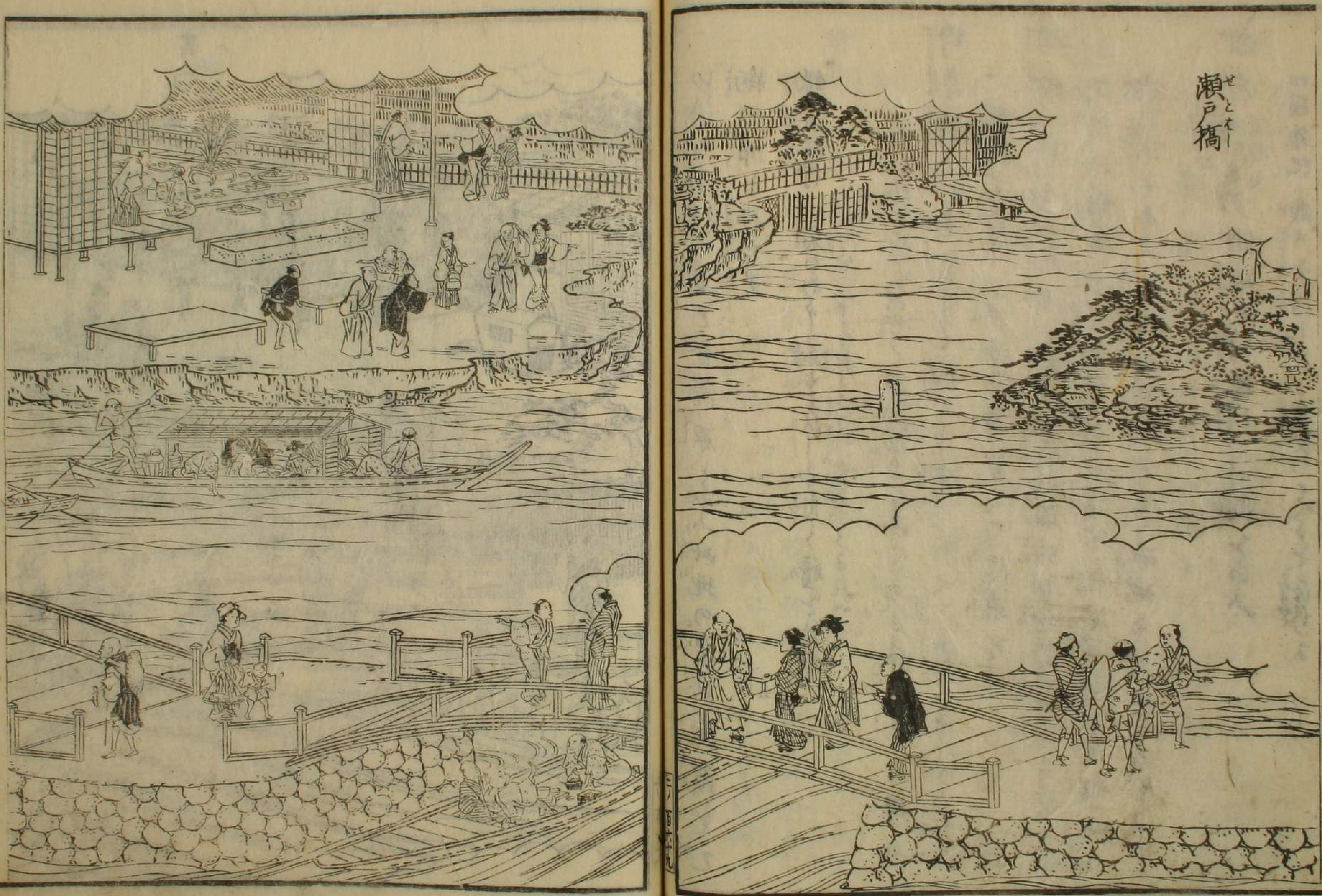
いひ町屋村の東を金澤原といふ此地の東北海濱をば
鞆の浦と称せり

鎌倉記行 宿のあるじ舟もよひして向ふ磯をめぐりし
汀をいづるに秋も色ある野島こぎゆけば
名の秋をあはせてあはれなり此島の浦に秋乃色 澤庵

野島渡し 野島より南の方室木村へ入渡しにして舟路
一町餘もあり江戸より浦賀への近道なり

洲崎 野島の西瀬戸橋の東北漁村を云 鎌倉志に云太平
記及び鎌倉年中行事等の書に洲崎とあるハ鎌倉山
内の西にある洲崎村の事にして此地にあらずと見え

瀬戸 或ハ迫門に作る 洲崎と引越村との間をいふ
四國雜記 瀬戸金澤といへる勝地のほとりを遊覧するに


瀬戸橋（せとはし）

旅亭
東屋
東屋

其二

瀬戸の沖に浮ひあまたこえてくるを

よる人も見えぬのなかしらぬ波の瀬戸の渡合渡はしらぬ人　道興准后

瀬戸山傍ひ渡りわたりもひとしほなかめけれハ

見されし瀬戸の海も見えし浅茅原し浮かくれなる影ぞ　仝

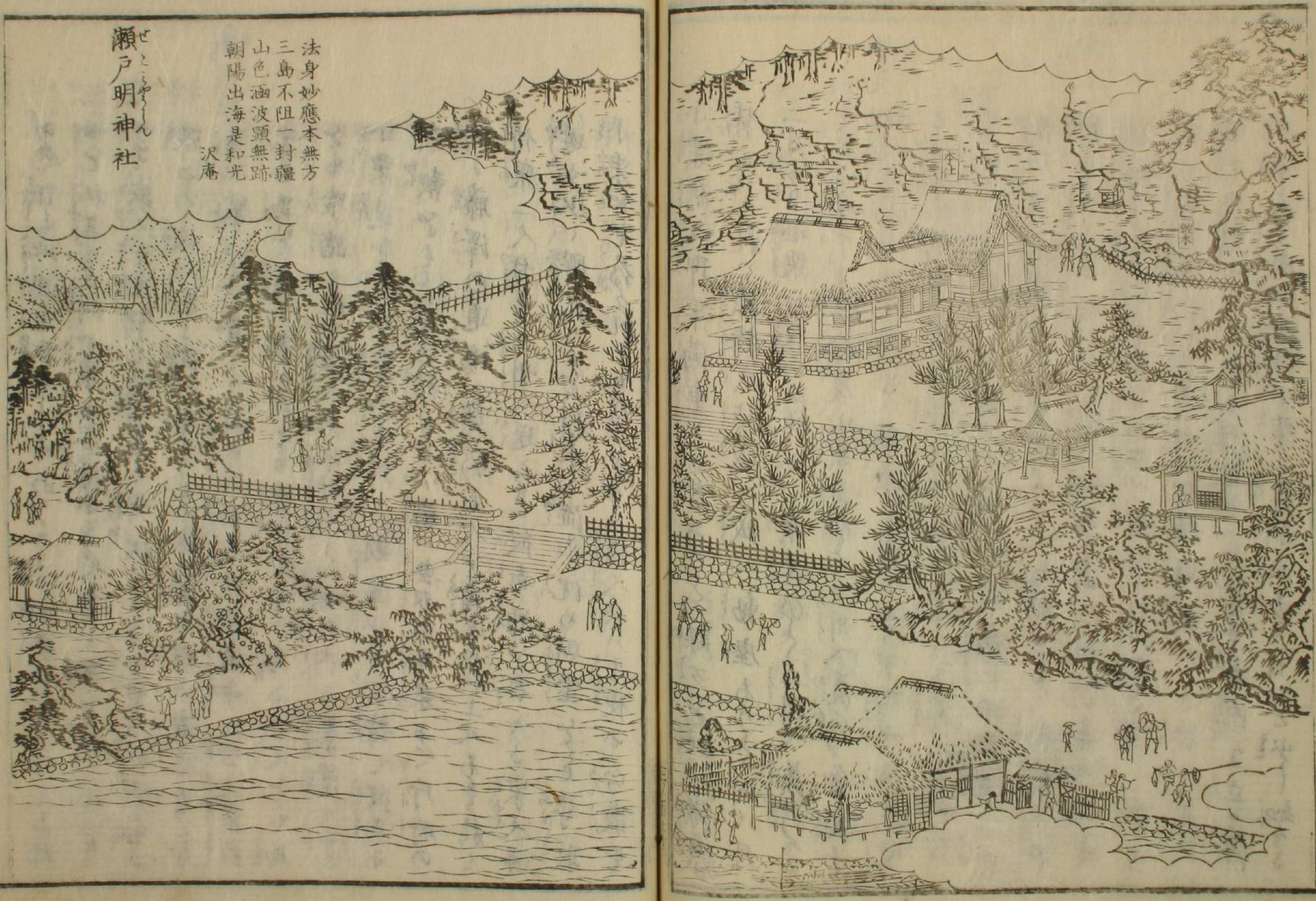
瀬戸橋　同し入江に架せ中間に臺を儲け橋杭を用ひず しかく長さ二間あまりに橋二川を渡しけるを

瀬戸の明神とて入海にさし出たる山あり古木影を麓に橋あり橋の下より潮さし入ぬれハ遥く遠き山の奥まで湖水となり潮引ぬれハ水鳥も陸となる景氣も朝夕にかはりまさり金閣も筆をふるひそさりしとなり云く　鐔鑰庵和尚の鎌倉紀行に

照天姫松　同所北の方西の出崎にあり延寶庚申の大風に吹折られしより迚一株の松の根株のこりを存せり里諺に云く照天姫の為に燻られしとて焼る焼さしの松とといふとぞ

鎌倉大草紙云　應永三十年癸卯春におゐて常陸國住人

小栗孫五郎平満重と云者ありて謀叛を起し鎌倉に背きけれハ源持氏結城の城へ動座ありて同八月二日より小栗を攻らる終に小栗忍ひて三州へ落行たるとある条下に云今度小栗忍ひて三州へ落行たり其子小次郎ハ忍ひて関東にありけるか相州権現堂と云所へ行けるを其辺の強盗とも集りける処に宿かりけれハ主の中ハ此浪人を常州有徳仁の福者の由聞て定て随身の寶あるへし打殺して取るへき由談合を作去健なる家人ともありけれは何せんと云一人盗賊ともの酒に毒を入呑せ殺せとの先と同し宿くの遊女共を集今様なと唄ハせ踊舞戯れたる彼小栗馳走の躰にもてなし酒をすゝめけるに夜酣に立たる照姫と云遊女此間小栗に逢馴此ありさまを悲しく知たる



瀬戸明神社（せとみやうじん）

法身妙應本無方
三島不阻一封疆
山色涵波顕無跡
朝陽出海是和光
沢庵

かゝる自も此酒を呑もしくありけるが小栗をあはれミまれ
由を私言ける間小栗も呑様にてそおし酒を更に呑けり
けれ家人ともも知らに何ぞも酔伏てけり小栗ハ夜初に出る
躰ふく林の有る間へ出るくれバ林の内に鹿毛なるか
馬を繋ぎくく置けり此馬ハ盗人共海道中へ出大名往
来の馬を盗ミ来れとも第一のあら馬なく人をも馬
とも喰踏けれハ盗人共不叶しく林の内に繋置たりし
小栗是をミて密に立帰り財宝少く取持て彼馬に
乗鞭をもつて落行る小栗ハ無双の馬乗にて片時の
間に藤澤の道場へ跳行上人を頼けれハ上人あはれミ
侍衆二人付て三州へ送られ彼毒酒を呑たる家人并
遊女少く酔伏たるを川水へ流し沈め財宝をと尋取
小栗をも殺けれともなりざりける盗人共ハ其夜に分散せ

行に立たる照姫ハ酔たる躰にもてなし臥たれとも本より
酒を呑ざりけれハ水に流れ行川下よりはい上りたまり
ける其後永享の頃小栗三州より来りて彼遊女を尋
出し種々の宝を与へ盗人共を尋皆誅罰しけり其後ハ
三州に代々居住せしといへり

鎌倉大草紙にありける考ふるに照天姫ハ照姫の事を云歟小栗の名を世々満重と称せれとも同書に小次郎とのミありて満重と云事をあらハに記し小栗系譜を考ふるに孫五郎平満重其子助重とありと雖も此小次郎か詳ならす。とあれ大草紙に出る所俗説に異なりといへとも尤證とすへし今世に云伝ふる所ハ出所より出て附会の説を備へたりしなるへし

瀬戸明神社 瀬戸橋より一町斗西の方道より右側にあり
祭神大山祇命一座之神主千葉氏奉祀も社傳ニ云
當社ハ右大将頼朝公治承四年四月八日豆州三島の御神を
勧請なしあふとあり鎌倉年中行事にも四月八日瀬戸
三島大明神臨時の祭礼とあり或云往古此神此地へ飛

来ることあるとも 土人傳へ云 今金竜院の庭中飛石となれるものはこれなりといふ

按ずるに頼朝卿鎌倉へ入給ふは治承四年十月六日なりと東鑑にみえ

たり 此七年四月八日豆州の配所にて北條の舘においてありしは神社司の傳ふこと

尤不審少からぬことを 小田原北條家の分限帳に六浦社領久良岐郡

六浦に神主拘とあり 六浦社領とあるは當社のことをいふなるべし

有督長像

安阿弥の作と云 今本社幣殿の内左右に置けり

近世里人粧飾を加へしに依て古色をうしなへり

額 内陣に拘る

正一位大山積神宮

世尊寺従二位経尹卿筆

同額裏書曰

延慶四年辛亥四月廿六日戊辰書之

沙弥寂尹

鳥居額 瀬戸明神 神道長正二位卜部季兼卿筆

鐘楼 社前右の方にあり 銘文左のごとし

瀬戸三島社鐘銘

洪鐘新製寄嶓海嶋竈神振徳衆人結縁韻徹遠近

銘體黄玄緇素益大村里聴鮮閑静動鬧奏敬悲田

驟化世俗頻敲夜禅覚煩惑夢驚生死眠昏曉清響

劫々永傳

大戒菩提薩埵 僧普川筆 普川國師は鎌倉宝戒寺の第二世なり

應安七年四月十五日奉鑄之

神主

檀那沙弥釋阿并十方四衆等

勧進聖 義道

大工 大和権守國盛

藥師堂 本社の右にあり 土人放下僧藥師と称せり

按ずるに放下僧は下野國住人牧野左衛門何某が子なる 兄弟を小次郎といふ

父左衛門上州伊香保の湯に浴せし頃 相模國の住人刀祢彈正信俊とゆへる

者と口論し信俊に討れたり 兄弟の輩親の敵を討むと放下に身をやつし

此瀬戸の三島明神の社前にて信俊にめぐり逢 終に親の仇を報ひぬる

よし 放下僧と号る謡曲にありといへども他の書にみえあらされ

三本杉 藥師堂のまへにありて根株相連りて三本なるひ生せしも

延宝庚申の大風に吹折られたりとぞ 今はなし

蛇混柏 本社の右の傍にあり 是も延宝八年庚申八月六日の暴風に吹倒され

たりとて今地上に横たはりてあり 其樹長大なりて竜蛇の起伏するが

ごとし 金澤八木と称せるものゝ其一なり

梅花無盡藏曰 文明竜集丙午十有八年小春二十

有七己亥盤桓瀬戸六浦之濱遺廟之前昔時諸

老所作之詩杉邊傍点劃不眠如新鐫之云云

同書曰 瀬戸社 自注云 六浦廟前有古柏屈蟠

遺廟拍闔六浦橋　朗吟繫馬石支腰
歸鴉飛破翠屛面　剩被風聲添曉潮

鎌倉記行

迫の明神へまうてけるに是ハ三嶋の大明神本地ハ大通智勝佛伊豆と同一躰なりと神職にそかたられける

まうてける宵の今ほとひの月社三嶋山に移されし神垣の内　浮巷
當社境内は千歳の古木雲を凌き回岩社頭を清くみ
そびゆる山の勢ひ実に巨霊神の手を延へし如くよりそ
此山を遷しけんとおもはしむ社前の老樹浦風に靡き
打寄る浪に下枝を洗ふ一根清浄なる時ハ六根共に
清く我人の頭に神もやとらせ給ふやと尊くそ覚え
ける

瀬戸辨財天　同社前道を隔て南の入海へ築出しける
小島にあり昔頼朝卿の御臺所平の政子御前江州
竹生島の御神を勸請せられるとあり
嶋の中泥拍多く植木今ハ枯たり

金龍院
飛石
範頼墓
大寧寺
室ノ木

同橋の下に福石と唱ふるものあり 金澤四石と称する一ツにして土人の諺に此石の形甚奇なり前にすぐれたるものを拾ひ得るものあれハ必有福の兆となると云伝ふ

鎌倉記行
社のまへハ島をつきあらして弁才天を勧請し給へくハ第一第二の橋あり島のめくり古木酒風に吹れちる浪志つ橋をあらふ

汐風もわきまぬ大海をさかしく神のまへにみえく　浮庵

圓通寺 日輪山と号す同所二町半斗西の方道より右にあり昔法相宗にして南都法隆寺に属せり今ハ天台宗に改まりて江戸の東叡山に属せり本尊ハ元三大師を安置せり開山ハ法慧法印と号す久世大和侯源廣之寺領を附せらる

東照大権現宮 山の上に鎮座なし奉る郡官柳木氏の勧請なりといふ

昇天山金龍院 同所西南の方四町餘を隔て同じ道の左側の海岸にあり世俗飛石山とも呼べり禅宗にして鎌倉の建長寺に属せり本尊ハ正観音座像二尺三寸行基大士の作なり 鎌倉志に虚空蔵菩薩を本尊とすとも志るす 方崖元圭和尚をもて開山とした 和尚ハ倹約翁の法嗣なり永徳三年九月十六日に寂す

飛石 当寺後園の山の麓にあり高さ一丈あまり廣さ九尺ばかりの巨巌なり昔瀬戸の三島明神豆州より此石上に飛移りたまふと云 或ハいふ是ハ往昔の近頃の地震に震落して平地に移ひてありと

九覧亭跡 同じ山の上にあり曲折して登るいにしへ人の儲ありし亭の跡なりとや詳ならず此所の眺望も又多景なり寺僧云此地の八景に能見堂を加へて見るところなれば名づけたりとなり

泥牛庵 金龍院の前路を隔て向側にあり禅宗にして鎌倉圓覚寺に属す本尊ハ七寸計の唐佛の十一面観音の像を安せり此庵の開祖ハ圓覚寺の傳宗庵南山和尚 諱ハ士雲 聖一國師の嗣法なり建武三年十月七日寂崇寿寺の開山なり 中興ハ習甫玄道座原と号せり 當菴の南一町斗山の上に古墳二基あり其一ハ海老名長門守といへる人の墓にして此人泥牛菴にて自害し

終りと云傳ふるのミなれハ時世事實ともに精しからす猶考ふへし　按に海老名源三季貞の後裔なるへし

荒井鈔法日荷上人加持水　同所農家金子氏の地に存せる井を云その味甘美なれハ尤霊泉なり此所の小地名を荒井と称せるハ往古日荷上人荒井平次郎光吉と号しゝ此地に居住せしによりてかく呼来るとなり　事跡ハ上人の條に次の上行寺の條下に詳なり

能仁寺舊跡　今の米倉候の陣屋の地なりとのミ此寺ハ昔上杉憲方明月院道合の建立なりしといへり

鎌倉志古記曰上杉房州太守築武州金澤能仁寺創七宇伽藍請方崖和尚為開山第一世瑞山曰福壽瑞寺日能仁太守有旨陞能仁寺位列諸山者也永徳三年小春日東暉曇昕謹記又本尊建立永徳二年三月七日始之同年四月廿一日終住持東暉曇昕奉行徳慧徳澤檀那巨喜上總州法眼朝榮作之大檀那房州道合徳珠書之

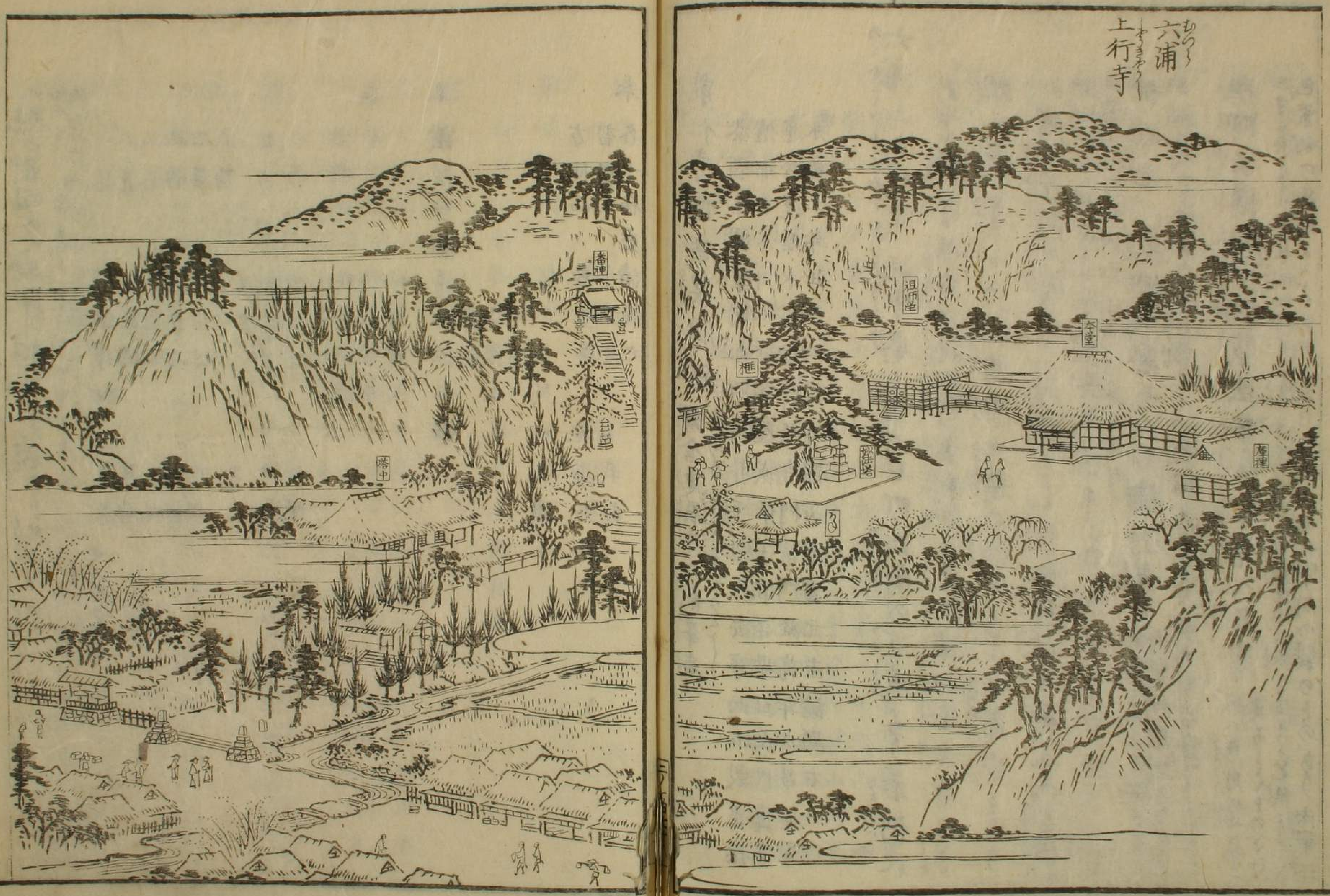
能仁寺佛殿梁牌銘　鎌倉建長寺の龍峯庵にあり其文左のことし

恭願皇圖鞏固而四海昇平黎庶安寧而五穀豊稔
檀那前房州太守菩薩戒第子道合敬白庄伏冀佛
運帝運歴永劫而綿延寺門檀門經萬年以昌盛者
永徳二年壬戌四月日開山方崖元圭謹題右

六浦山上行寺　泥牛庵より六七町西南の方道より右側にあり當寺往古ハ真言の古刹なりしく六浦山金全寺と号す然るに應安年中此住持某日蓮の法をきゝ日蓮宗となり北總中山の日祐上人を開祖とし自ら妙法日荷上人と号す　日祐上人ハ千葉宗胤の孫貞胤の子なり北總中山の妙法華経寺の第三祖なり

祖師堂　宗祖日蓮大士の像を安す　座像二尺三寸余あり法華経讀誦のさま也　日法上人三十三歳の年日常上人の指図によりて彫造せしとなり

祖師木像胎中收蔵法華經書寫人名簿　紙ハ常用のものなり厚薄かしくそのうけ三寸三分ちりその巻紙へ細字に書くるものにて表紙もなく巻くるまゝを紙ニて包紫銅の経筒に入て胎中に収む経筒ハ明和年間の製のものなり法華経


六浦上行寺
番神
塔中
祖師堂
本堂
榧
庫裡

八巻ニ書写の人名簿一巻共ニ九巻あり其文ニ云く

御身の御経奉書写之人々

一巻 圓融律師 日源 安立坊の開山

二巻 良範坊 日秀

三巻 正圓坊 日正

四巻 祐眞坊 日傳

五巻 良範坊 日秀

六巻 衆寧阿 理賢 両人

七巻 衆寧阿 日宣

八巻 理賢坊 日理

右願主 卿公沙門 妙光慈母 妙法親父

奉造立

奉讀誦妙法蓮華経五部 良範 上総公 正圓 一府 同心久讚

奉 方便品 壽量品 普賢咒 十如是 陀羅尼品 各十扁究讀誦之 自我謁

奉讀誦 十如是 自我謁 題目百廿反

奉唱題目一萬反 日源敬白

御身ノ形相中老日法上人御作也

應永十三年丙戌十月十三日

右六萬恒沙上首上行菩薩此御利益者尓住迹用本名字初隨有喜形相身任御附屬妙法之要五字弘一天四海秘法良藥施萬人明廣炙流布因揲純就信心大施主等之成就所嚴迷者也

釋迦堂 祖師堂の右ニ並ぶ其間ニ廊を備ふ 本尊釋迦多寶四菩薩 當寺往昔真言宗し時の五智の如来の像ありしとぞ

六浦妙法日荷上人石塔 祖師堂と釋迦堂との間梱の本にあり一丈斗中段の石のミ往古のまゝにして上下ともに後人造り添ゆるものと見ゆ中段の石の横面に文和二年六月十三日と彫付てあり妙法ハ當寺の大檀那にして宗門にうつれる沙門なり妙法俗称を荒井平次郎光吉と号す建長六年甲寅日蓮大士北総中山に於ひ後相州鎌倉へ帰らんとしける日冨木常忍と同船して此六浦に着岸あり其頃此妙法上人未荒井平次郎光吉と称しけるか日蓮大士の化道をうけて上足の日祐上人に随従し出家得度の後妙法と号す文和二年癸巳六月十三日示寂を依日荷上人と

謚も肖像ハ中山法華寺にあり又妙法の住せし旧跡ハ今の金竜院と米倉家陣屋の間なりその地を荒井と号す前の日荷上人加持水の条下に詳なり又云江戸谷中延寿寺の記に妙法律門日荷上人ハ六浦荒井の城主播磨守と号せるとあれとも城主とのみ考へす或ハ此妙法ハ杉田如法と号して北条時頼の臣なりと云あれとも時頼逝せる年歴を以て考ふるにもとせる時代なかるへし

寶篋印塔 祖師堂の前左の方の山の裾にあり高さ一丈二尺あまりありて塔の正面にハ梵字を刻し横面にも文治元年の紀号を刻せり

當寺往古真言宗なりし證なり

按に米倉家陣屋の上にあり上行寺の後の山續ハ知足山龍華寺の旧地なりしと云今も上行寺の後の山の上畑道の号に花蔵院橋と号せるものあるハ昔竜華寺支院花蔵院の門前にありし橋なるゆゑにかく号とあり

鎌倉志に當寺什宝に位牌一枚あり日祐上人の筆の曼陀羅を彫其下に日祐上人一世の間引導せし人々の法号俗名を挙て應安三年と記せり又日祐上人の大曼陀羅及ひ日蓮大士の消息等を存する由記されたれとも今當寺になし伝へすと云

金剛山嶺松寺 同所三丁斗を隔て西南の方道より右側にあり禅宗にして建長寺龍峯庵に属せり本尊ハ釋迦如来の木像を安置せり開山ハ月窓和尚と号す 諱ハ元暁紀州の人貞治元年十一月二日寂せり 倹約翁の法嗣なりと伝へ云當寺ハ千葉介胤義の建立にして鎌倉志に瀬戸明神の鐘の銘に神主平胤義とあり神主ハ平姓千葉氏なれハ此人の建立歟千葉系図にも胤義と云有り寺建立のことはいまた詳ならすと云々 因に云千葉家累代の塋域ハ本堂の後園百歩

六浦 ちくやまを隔て山傍にあり 東鑑六浦六連 武ハ六面に作る 東鑑に将軍家此地に遊覧のこと往々えたるも又同書に建久三年壬子二月廿四日丁卯武蔵國六浦海辺におゐて上総五郎兵衛尉忠光を梟首す義盛是を奉る云々又鎌倉大草紙に應永四年正月廿四日小山若犬丸か子とも二人弱年なりしを會津の三浦左京太夫是を召捕鎌倉へ進上したるを実検の後六浦の海に沈らるとあり 北条九代記に田村庄司則義小山若犬丸に與して管領氏満に叛きる鎌倉より攻られハ則義ハ自害す其子五歳と七歳

侍従川
光傳寺
天神
本堂

かゝりしを生捕て六面の沖に沈めをうけられたるとありて些しく興あり

永禄の頃ハ小田原北条此地を領し六浦木曽分の地ハ武田家へ付し同所大道分の地を龍源軒とせるに付したる由分限帳にみえたり

澤庵和尚鎌倉記行

わくれハ三月鎌倉へ赴く路に一坂を越れハ里あり こゝをむつらの浦といへハまことに海士の子ともの此あそふをみて

むつら六浦七浦の海人の子乃拾ふハ浦の喜千浦けん　澤庵

海士のすまゐ此あたりをさく

濱あれむつらの浦の海士の岩かけをたちもはちらむ　仝

六浦川 此地の道を横きりて流るゝ小溝を云又此溝に架す小橋をも六浦橋と号くといふ

専光寺の辺より光傳寺の辺迄の地の字を川村と称ス按るに昔の水流の旧跡なるにかくをなつけしん歟

日光山専光寺 嶺松寺より二町計を隔て南の方道よりも右側にあり浄土宗にして同所天然寺に属せり本尊十一面観音ハ立像一尺計にして佛工春日の作なりと云相傳ふ照天姫の念持佛にして姫松葉にて燻らせし時身代りに立たまふと云傳へたり寺の後の方に日光権現の宮あり故に山号とせり

油堤 同し寺の後の田圃を隔て半町はかり西の方に續きたる山を油堤と云由土人云り 鎌倉志にも専光寺の前にありと記せり 里諺に照天姫の乳母侍従とよへるもの姫の粧具を携へ此所迄尋来りしかとも姫の行方しれさるを歎き悲しみて彼粧具を捨て終に此所の川へ身を沈めたりし故に号とす

となり

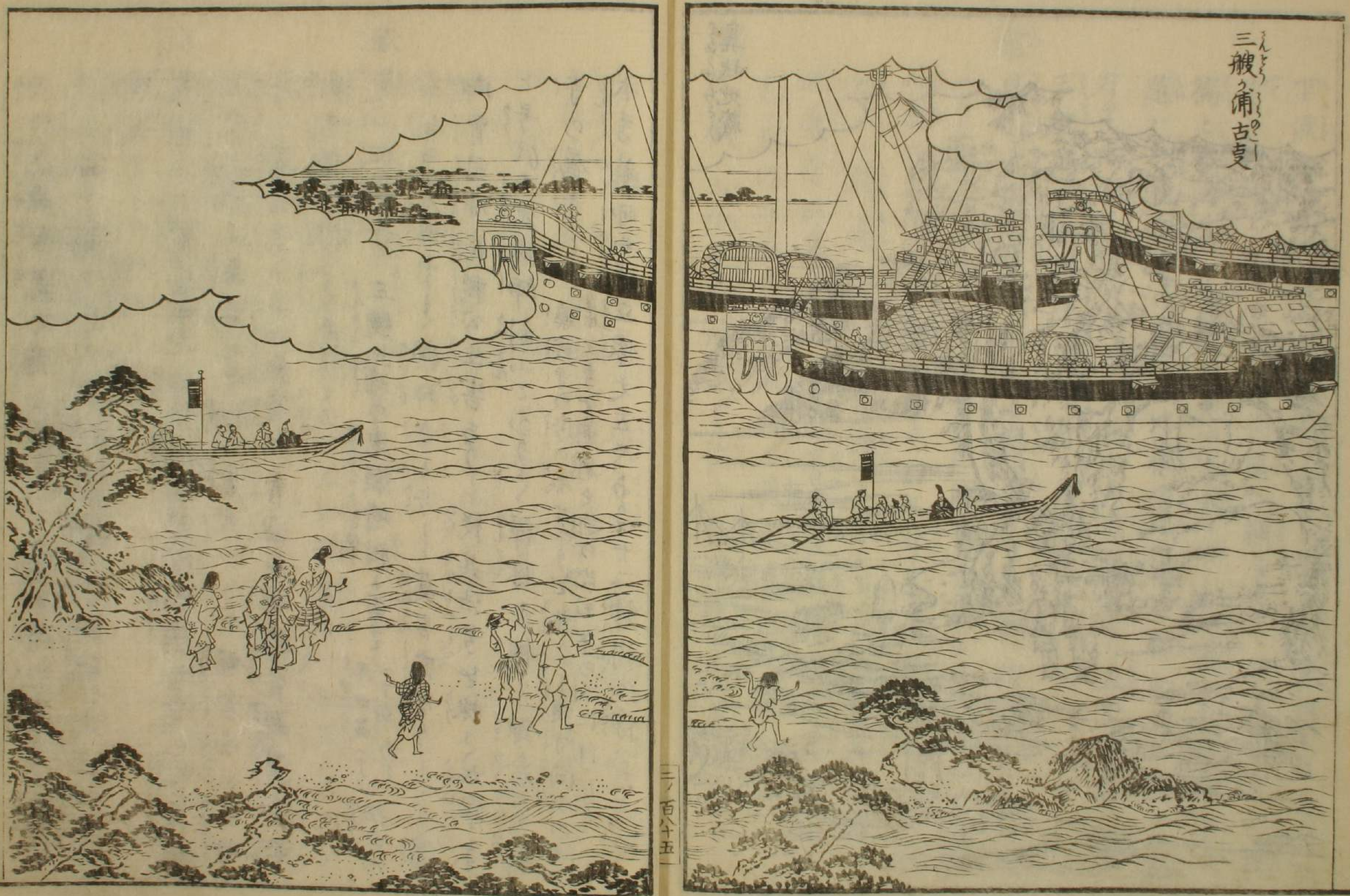
侍従川 川村と大間村との中間光傳寺の前を流るゝ川の

下流をなす水源を鎌倉より發し末ハ三艘村より塩濱へ出て海湾に會す瀬戸街道へ横たはりて架せる橋を侍従橋と号名義ハ油堤の条下に云が如し此橋を渡りて右の道ハ武蔵相模の國境地蔵の辻へ出て鎌倉へ往還の道なり南行の道ハ三浦三崎への通路なり左の川傍の道ハ三艘浦又相州境浦郷等への道なり

常見山光傳寺 同所北の端道より右側侍従川に傍てあり浄土宗にして鎌倉光明寺に属せり本尊阿弥陀如来の木像にて立像にして四尺斗あり作者しれず開山ハ得蓮社忍誉霊傳上人と号す門の内右の方に地蔵堂あり本尊地蔵菩薩ハ立像六尺斗ありて運慶の作なりと云 地福山蔵光寺と号す

界地蔵 土俗鼻缺地蔵と称す光傳寺より九丁あまり

鼻缺地蔵


三艘ヶ浦古叓

西の方鎌倉道の傍にある巨巖の壁立したる所に此尊像を鐫出せるを（尊像の鼻缺損せし故に鼻缺地蔵と云）此所ハ武蔵相摸の國界なれハ峠村と號く

三艘浦　六浦の南向三艘村にあり永禄九年の春唐船三艘此浦に着岸せし故に名付くとぞ鎌倉志云其時舟に載来りし一切経及び青磁の香爐花瓶等を皆称名寺に傳へてありと云

海蔵山太寧寺　三艘ヶ浦の東瀬崎村にあり（界地蔵より二丁斗あり）往古ハ布金の道場にして薬師寺と号し真言宗なりしが蒲御曹司源範頼公生害ありし後其法号を採て太寧寺と号し千光國師開山となりて禅林に轉し鎌倉建長寺の属寺となりしを（薬師寺の号の廃せんを歎き其頃寺前村の地へ薬王寺を開創す前の薬王寺の下に詳なり）本尊薬師如来立像丈五尺あり十二神将の像ハ三尺斗ありて共に運慶の作也鎌倉志に當寺勧進帳を引て云往古伏見帝永仁年間此村に貧女あり父母の忌日に當るといへとも佛に供養しまつるべき便なし絲を繰巻子としてこれを賣て佛餉に備へんと思ふ然れとも容易に買人なし或時童子一人来て是を買ふ其價を以て父母の忌日に供養の料に充志しけるに佛前に至るに件の価そ多くありて依て知ぬ如来貧女が純孝なる志を感して自介以来へそ薬師と云とあり（此故に今も此薬師佛へ祈願のものある時其祈願成就するものハ報賽として麻苧を臍巻にしてまゐらすとぞ）

蒲冠者範頼靈牌（堂中に掛其牌面に太寧寺殿道悟大禅定門神儀裏に範頼公建久四癸丑年八月と彫付あり）

範頼墓（本堂の後の山麓にあり高さ二尺六七寸ばかりの五輪の石塔なり墓石を土中に埋む）按に異本源平盛衰記に範頼伊豆の修善寺に籠居ありしを景時又頼朝に申して伊豆に越景時父子三人五百餘騎にて修善寺に押寄

範頼ハ或坊ニ小袖ニ大口計ニてありしかるが差詰引詰散々ニ射かけゝる寄手多く射殺さるゝ後矢種尽ければ坊ニ火をかけ自害してぞ失られける其後景時煙を静め範頼の焼首取て鎌倉ニ持て行頼朝ニみせまゐらするとあり鎌倉志ニ云く首級を此地ニ葬しも未詳とあり

題太寧寺六首　絶海

寺樓一抹晩江煙　朝送鐘聲落釣舩
老矣身心機事外　間鷗容我社中眠

残暁杳消柏子煙　老来無夢趂漁舩
聞君去借江村宿　一夜鷗邊看月眠

六浦遥連三浦煙　趂風隨岸幾移舩
興来撐棹窮佳處　月落前灣猶未眠

山街夕日水籠煙　雪後蘆花月満舩
蓋世功名身外事　幾人能得一菴眠

衲衣懶惹御爐煙　還愛華亭載月舩
晩興遅留江上寺　三山翠映白頭眠

功名蓋世畫変煙　失墜光於灔澦舩
一錫歸来楓外寺　白沙翠竹閉門眠

當寺書院ハ北ニ向ふ瀬戸の入海を眼下に臨く風光殊に勝れたり寺寶に範頼自筆并古哥の懸幅及ひ陣中用ひしと云長刀一振あり

窟根権現社　瀬崎の東室木村にあり又民家の間に犬樟の老樹あり

雀ヶ浦　同所の南北出崎をいふ菅神の小祠あり故に土人ハ天神崎とも称す此地の海灣を浦の江と云

巾着巖　同所絶壁の下にあり大さ二間四方許盤石あり潮尽る時ハ形全くあらはるゝ形巾着に似たり故に土人かく名つく

根附巖　同所百歩許を隔て西南の方北崖下にあるをいふ大さ六尺あまりの巖なり潮盈る時ハ隠れて見えず前の巾着岩に比してその名あり

摂戸湊　刀切村の南の入海を云

四國雑記

浦川の湊とかやいへる所に到るこゝをむかし六浦の庄金沢郷と申ける時今ハ瀬戸摂戸浦川とて三つの湊なりけるとかや

摂戸をさしてゆく浦河の小門をわたりて

道興准后

雀ヶ浦（すゞめうら）
大天神
小天神

烏帽子島　同所東の出崎の小島をいふ形状烏帽子に似たる故に名とせり

鎌倉記行　名残し嶋といふもとそも志るし

釣夕に浪よせ来ぬる烏帽子の浦沖よりふき風にやされ　洋庵

夏島　同じ東にあり長三町余り横一丁斗れ小島なり里人云く玄冬の雪といへとも積ることなしといへり

鎌倉記行　夏嶋そ名のみなりけり時ハ冬なから

三冬にも降白雪もたまらねハこれや夏嶋の名にし消らん　洋庵

猿島　夏島の東南にあり五丁四方もあり

裸島　同所二三町をへも離れたる小島なり

按に洋庵和尚の鎌倉紀行に笠島といへる名を挙て其詠に

かさしまや来てとふ里の夕時雨ぬれぬ宿かも人しありやと

かくあれとも此地に笠島あるをしらす恐らくハ猿島裸島二島の中を指してかくいひけるなるへし

甲香　此れハ金澤の名産なり兼好法師の徒然草に甲香ハ螺貝の様なるか小さく口の程の細長にして出たる貝の蓋なり武蔵國金澤と云浦にありしを所の者ハへなたりと申し侍るとそいひしとあり野槌に今金澤にて尋ぬれハないといひまた法螺とも云とあり

江戸名所圖會天璇之巻　終畢